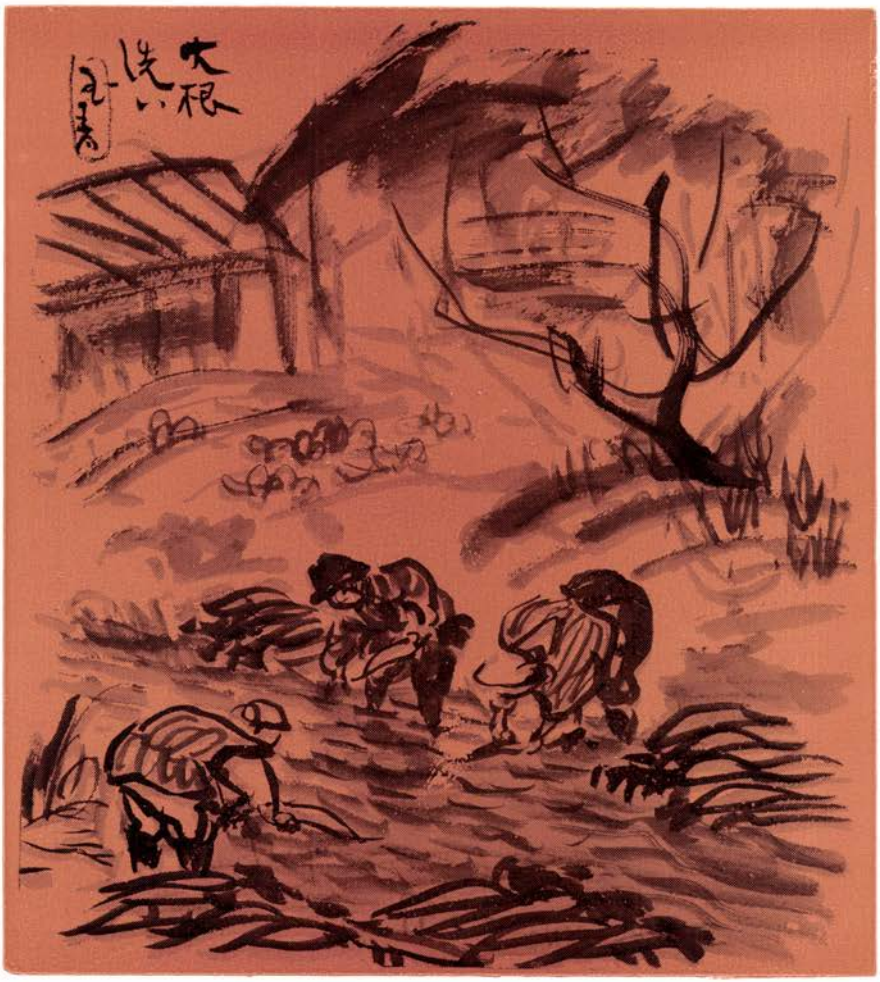
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年十一月二十五日 印刷
昭和四十七年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五四七号



No. 547

47年度秀句抄

十二月号

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社

大　阪　支　店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電　話（779）1690～2番

蓬莱商品の目印

551

豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば　蓬莱　TEL(641)0551～2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

萩の旅

天地悠々石筍のささやきつみ重ね

奇観壮観マリヤ観音像も佇ち

豪勢なパーテー百枚皿が待ち

夏みかん青く沈んで武家屋敷

雪舟の筆塚床し常栄寺

中島生々庵

萩焼き

機会を得て山口県の秋芳洞から萩焼の窯元を見学する旅が出来た。その機会というのは大学同期卒業の老童クラス会が毎秋地方に出掛ける二泊旅行である。

昨年は金沢から能登、今年は萩という具合である。人間が骨董じみてくると皆の希望も、こうした方面のワビを慕うのであろう。坂高麗左衛門と坂上新兵衛の両お宅を伺った。高麗左衛門さんはお留守だったが庭園のただずまい、古式にのっとるのぼり窯、お茶室では初代からの逸品を見せて頂くし、新兵衛さんは親しく工房で仕事着で土によごれたまま、いろいろお忙しい中を柔和な表情でお話を頂く。

本年五月無形文化財となられた方だけのご仁とあって時おり鋭いまなざしを感じるのは、なんとしても芸術の重さである。しっかり大地をふまえた「いのち」というもののきびしさ、尊さを、昨年の輪島でも、今年の萩焼でも強く味わされた。「いのち」というものが決してチョロこいものでない事は川柳でも同じように言えるのだ。

座右の句

君見給えほうれん草がのびている　（路郎）

私の句

ここに詩ありて路傍の石となり

水粉千翁

川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

萩焼き……中島生々庵…（1）
二十年を顧みて……傍島静馬…（2）
川傍柳初篇研究…（百十三）……前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唖三味・丸博美・藤井和雄十府・岡田甫……（20）
北京桃源境……東野大八…（22）
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
近作柳樽……菊沢小松園選…（30）
一分間の柳論……奥谷弘朗…（47）浜野奇童…（49）川竹松風…（53）
秀句鑑賞…（同人吟）……正本水客…（42）
……（近作柳樽）……橘高薫風…（43）
川柳五十三次…（完）……冨士野鞍馬…（40）

二十年を顧みて

傍島静馬

私は、十月の本社句会席上で、川柳塔句会連続二十年間全出席（川柳雑誌時代から）の表彰を受け大いに面目を施した。

好きな道を好き放題にやってきて斯様なお賞めに与るなど夢にも思っていなかったので大へん嬉しかったが、反面何んだか私だけがいい子になったようで面映い気がした。

私の川柳入門当時、先輩の中には、五、六年連続全出席者は十指に余るほどの賑やかさだったが、ただ一回の欠席から、いずれもあたら貴重な記録をフイにして、遂いには後輩の私一人が取残されてしまった。

幸い、私は健康に恵まれ、家族の理解（というよりは私のゴり押しを半ば諦めていた）もあったおかげで、念願の連続二十年間全出席を果すことが出来た。だが、流石に二十年は長かった。降りしきる梅雨の最中を、秋の台風のスキ間を縫うて、或は北風すさむ冬の夜オーバーの衿を立てながら、会場に程遠い神戸から、高槻からそして現在の宝塚からよくも頑張り続けたものだ。また、少少の風邪

近詠……諸家……(39)
詩と小説の……高鷲亜鈍……(40)
47年度秀句抄……(24)
通信……東野大八……(49)
山の句……鈴木村諷子 香川酔々……(49)
川柳師走の顔……不二田一三夫……(44)
雅号ぶっちゃけばなし……荻野鮫虎狼……(63)
初歩教室……本田恵二朗……(52)
大萬川柳「蓋」……川村好郎選……(54)
柳界展望……(新之助)……(56)
本社十一月句会……(庸佑)……(58)
各地柳壇……(文秋)……(61)
一路集「餅花」……竹中肖二選……(50)
「腕っ節」……林葵丘選……(50)
「浴客」……野村岬月選……(51)
編集後記……(一三夫・葉子)……(65)

座右の句

大輪を咲かせ隣人よろこばせ　(トク子)

私の句

ありがとう抱いてイエスにかえる日々

土岐　トク子

ぐらいは問題にしなかったし、都合良く仕事のやりくりをしたり、旅行先から際どい辷り込みをやったり、宴会の途中を抜け出したり、ときには飲仲間の思わせぶりな誘いを、しばしば断ったりしたが、その頃よく飲んでいた私にとって酒の誘惑から逃れることは容易なことではなかったが、どうやらそれを乗り切って来た。

川柳の作句道場として句会は大へん楽しい場所であるが、自信の労作が抜けなかったり、運悪く全没の憂目に遭うたときなどはとても淋しいもので、私にもその経験が一再ならずあり、幾度か次の句会出席を躊躇したことがある。だが折角築き上げた連続出席記録をフイにするのが惜しく、意地もあったので、其後は句会の成績如何に不拘出席し続ける決意をした。その結果が今日の栄光を生んだものと思っている。

川柳塔同人、板尾岳人氏は金剛登山二百回の記録を持つ猛者だが、次の目標は私の句会出席記録を破るんだとファイト満満だが、氏の若さと精進次第ではさほど難かしいとは思われず、是非とも記録を更新してもらいたいものだ。と同時に第二第三の板尾氏の出現を期待している。そして楽しい句会の雰囲気を更に更に盛上げてもらいたい。

〃優駿の追尾に鞭を当てる駑馬〃

川柳塔

西尾栞選

大阪市　金井文秋

美容体操ご飯が美味いのに困り
法事まで延ばしておこか畳替え
脱ぐと云う変身もあり生きる道
本業は惰性趣味には生き生きと
定年とはよくしたものさ物忘れ
靴の字が靴の形になる靴屋

倉敷市　小野克枝

逆転のいま靴紐をしめなおす
信仰に踏み切る勇気無く平和
理屈抜き低い鼻でも可愛くて
馬鹿になり切れぬ一直線の顔
恍惚の人にはさせじ肩をもむ
追憶の湖に小石を投げて秋

岡山県　直原七面山

既制服のような私の半生記
左遷させた課長と心にもない握手
老いにけるかな医療費が只と言う
口汚く美人をこきおろすのは女
蹴飛ばされて空鑵派手な音を立て
仲裁役が飲んで二人は飲まず居る

松江市　吉岡遁児

勤続三十三年表彰受彰全句

幾度か坐折の危機があって今日
兵位なら伍長あたりか三十年
三十年悔の積木を積んでなお
三十年長の肩書軽くなし
三十年元手まだまだとれていず
これからは軌道修正効かぬ旅

香川県　三井酔夢

大窪寺（四国八十八番札所）にて

子遍路の長い祈りは何ならん
打ち納め俗世に戻る鐘をつき
悩むはて娘遍路の顔きびし
信心で来た顔でなし栗赤飯
愛犬の供養に来たは秘めたまま

遍路ではないが心に鈴を持つ

倉敷市　本田恵二朗

うぬぼれがおもちゃのラッパ吹いている
鳩の目を三角に画きほくそ笑み
いらだちをチャイムの音に吸い取られ
ゆっくりと吐く正論に押され気味
すねているどうやら好きになったらし
うけ売りのセンスを押し売りしてまわり

大阪市　正本水客

峠くだれば沼は処女地のままにあり
あお黄あか秋を三段に染めあげる
天と地のふれあうところ沼光る
沼の白紙に木の葉が秋を描きにくる
池塘朱に燃えてヒウチ岳ゆれる
草もみじ果ての果てなる陽の名残り

尾瀬

尼崎市　黒川紫香

故郷の土を素足でたしかめる
芒の穂月の出そうな景になり
雲走る峠は柿が熟れて揺れ
灸すえて一日ずつを大事がり
年金をもらうやもめも淋しいね

青森市　工藤甲吉

ボタンかけ直し日中新紀元
秋刀魚お前も貧乏をあなどるか
生け捕りにされて尖んがる鮭の口
ほうずきへ思いはるかな妻の秋
秋わびし晴れた空から雨が降り

豊中市　戸田古方

身をくねらして地虫は鳥に喰われたり
アッ痛とニュートン頭へ手をやった
ボンボンにはあたり前やと思われず
チンドン屋みたいなモーニングもあって
大まじめであるからそれが面白く

大阪市　大坂形水

割り勘で行くとこでない銀座裏
東京はわけの分らぬ金動く
敷かれてる男欠席言うてくる
若いのがするスポーツでないゴルフ
「恍惚の人」を読むなと妻へ言う

泉佐野市　阿万万的

環境破壊反対村の一本杉
旅なれて寝つきのよさを自慢する
スイッチバックこんなとこにも田があった
待交待静かな村の朝を見せ
日本画の色で大和の朝が来る

倉敷市　水粉千翁

押し花へ添えて二行の物語
孫抱いて日本一の重さ知る
欠点を突けばたばこの輪をつくり

赤とんぼさんへ任せる秋ざくら
前文で野菊ちらほら咲きました

松原市　谷垣史好

植木屋が来る日の小春日和かな
遠い瞳になって吹いてるハーモニカ
胸張ってみても肋が浮くばかり
権力のイヌになってた拳法部
十二月小鳥の水をまた忘れ

出雲市　尼緑之助

百円の価値週刊誌の末路
雪どけの長さへ角さんが出た
お帰りのバス　子のアパートからお発ち
残業の一杯十二時を聞いた酔い
よく出来た写真ながらもこの皺よ

大阪市　山川阿茶

日中復交
台湾へそりやつれなかろうぜ秋の風
ゴキブリを追いかけまわして秋一人
焼芋を男が買えばしみたれる
破壊につながる知性とはかなし
脳不在自律神経だけで生き

藤井寺市　西いわを

甘口や辛口やなと猫の舌
新築へ何か足らない柱掛け
六法全書手放さずとも爪を染め
霊感を受けて踊ってみたろうか
二杯酢の蓮の歯ごたえ冬のもの

宝塚市　傍島静馬

忘れものしたよな新聞休刊日
お亡父さんあなたの年齢まで生きました
景勝にあばたを残す土地ブーム
老人医療無料になって出る病い
参道に散髪したての物もらい

高槻市　福田丁路

還暦を過ぎた厭味のないお洒落
颯爽と黄金の波に乗る蜻蛉
名物の味と香りに照る紅葉
悪魔に変身したろかとも思い
駅弁のない空の旅のあっけなし

鳥取市　河村日満

来て二十日朝夕孫の方も飽き
花火花火で七夕がすぎ盆がすぎ

串本にて（二句）

地平線のまるさカメラに入りきらず
岬からまるい地球を疑わず

瀞峡にて

半分はうつつで戻る瀞コース

高槻市　若柳潮花

意地で飲む酒盃洗の水をあけ
明日は散る花のいのちへ水をやり

らくを去ぬ楽屋で踏んだつけまつ毛

六甲山より有馬へ

まだ風になびかぬ色で萩が咲く
宵からの雨に有馬の灯も濡れて

倉敷市　小幡里風

とりあえず裸で話すことが出来
弱点を握られている胸騒ぎ
末っ子の告げ口ママが笑い出し
勝ちとった裏で初心を温める
ポケットの拳が僕に味方する

岡山県　浜田久米雄

いつの間に来たか師走の風が吹き
がたの来たしようこは異状ありへ〇
パン食で時々胃腸いたわられ
ぎりぎりのところで貯金帳を出し
年寄りの顔が目につく昼の汽車

門真市　福島鉄児

優勝の拍手敗者の拍手とも
泣き叫ぶ孫へおろおろするばかり
和服着て女おんなを取戻し
左遷されて公害より脱皮
出鼻くじかれ引っ込みつかぬ尻

大阪市　本多柳志

よろめきをいざなうマッチ握らされ
禍福さまざま家相に嘘のある社宅
昔昔の義理を返して見直され
徹夜して小異は残す会議室
物にもの言わせて通す横車

神戸市　仲どんたく

処女母性抱きしめている縫いぐるみ
年中行事辿れば死への行進か
より戻す握手に周の手のぬくさ
下車までをひたすら食べる女連れ
家内より長いつき合いやなあと飲み

伊丹市　小川静観堂

恍惚だろうか上手に年をとっても
どの写真も後列ばかりの妻だった
骨壺はお骨を容れるだけのもの
高速がお江戸日本橋の槍の邪魔
鎌倉やお久しぶりの善い仏

桜井市　岩本雀踊子

声帯にのらぬ怒りを握りしめ
絶望の影が伸びて来た西陽
ネクタイをゆるめて旦那様が酔う
皆派手に笑って家が暖い
手におえぬ児童をおぼえていてくれた

和歌山市　垂井葵水

流しソーメン水の旨さも掬くてくる
振りむいてくれても追いたくない女
悪運に魅入られているコップ酒

ひとことを耳にはさんでからの運
花言葉愛の鮮度を確める

岡山県　浜野奇童

少年A（五句）

涙してみても所詮は他人の子
肉親でない佗びしさのペンを置く
子を叱る涙も親のものでない
義理の子を叱って親になりきれず
万引きをした手を叩いて父母がない

愛媛県　渡辺暁童

あれもこれも有るのですます年で無事
失恋は男みたいな女の子
女子大卒の一知半解
戦死もせずに車で事故死
妻の敬語はたくらみのうち

兵庫県　遠山可住

一望に秋見下ろして無住寺
落穂拾うしみったれとは別なもの
話し込んでみればあんたも不しあわせ
手伝いに来てるに犬に吠えつかれ
にんにくの口でヒソヒソささやかれ

堺市　藤井一二三

日傭いの今日食うだけの汗を出し
酒好きへ又錦秋の山が燃え
出世もう諦めて碁の手があがり
燃えるもの持たず宗教書を読む娘
彼岸花の朱がうらめしい薄い胸

八尾市　高杉鬼遊

かまきりが秋にしてゆく秋の彩
花ざくろ棘のひとつは一人刺す
ぎょうざ食う逢わねばならぬ人もなし
産声は何のてらいもなく叫び
逢えなくば遊びとは言えすこし妬け

小松市　馬場魚山

安楽に死にたい寺のお世話する
医者替えて見ても禁酒を誓わされ
散ることを知らず造花にあるなやみ
花びらと知らずにくもの身が軽い
お薬師の鐘で目覚める湯治客

西宮市　磯野与志

へんこつが取柄マンションの管理人
管理人ほんけがえりにあてもなく
虫の音と心がかよう手内職
ダイヤルを半分廻して気が変り
指切へ小指はちからありったけ

西宮市　島居百酒

悪友へ未練の別れする子連れ
くるりっと脊向けて直角にそれた恋
さぼったを見付けた部長もさぼっとり
真向に部長もさぼって来た土俵

赤い羽貧者の一灯ほどもなし

尼崎市　高津徹也

鬼瓦すでに消灯老いの家
木枯しへ絶唱誰に向いてや
木枯しの拒否しつづけて枯れゆきぬ
木の実落つ晩秋という日も落ちる
くるみ割る音よ再起の故郷を発つ

大阪市　有信新之助

よく稼ぐこはぜは男にはずさせる
面倒なことになった靴ベラを置く
腕時計はずせば枷の音がする
美人が撰るL寸の男シャツ
タラップで歴史にのこる手が振られ

守口市　羽原静歩

流れ去る日々へ遅れまいとする
一発の花火もあげず人生譜
溝掃除年寄組へ入れられる
民芸紙崩れる冬の雲となる
秒読みとなる本番の気のつかれ

倉敷市　野田素身郎

エッチな話がサラリとできるのも四十
読書週間今夜も悪友飲みにくる
部下のミスを笑ってかばう肚ができ
一席設けて正論を封じ込め
胴長のわが子が目立つ運動会

新宮市　大矢十郎

信じたい人も悲しい嘘を云う
御近所が何を指折る岩田帯
君が代の歌詞かかわりのないヤング
スマートがこうも着こなす同じ柄
早起きへまさかの人が配る乳

富田林市　岩田美代

おしろい花咲かせて縫物上手なり
華やげる彩もないけど土用干し
虫時雨ためらう程の坂下りる
行く道もふり返る道も音痴なり
安全な立場でくさし気が晴れず

八尾市　香川酔々

おんな坂風の指図で木の葉降る
くいちがいおとこ・おんなの砂時計
底抜けの善人容れよ秋の天
ジンフイズさてこれからの足の向き
天牛を出れば寛美の阿呆づら

富田林市　木村弥栄子

たわむれの愛の別れが怖くなり
人生の迷路で私を探す笛
男女別銭湯とトイレだけとなり
仮り結びした糸ほどけない悩み
甘い唇蜂はヒップに針を持ち

和歌山市　野村太茂津

人民服どこがポイント女性たる
恋に泣く人民服が見たくなり
照り翳り所詮は女と知りつつも
長らくのお待たせ期待と義理で聞く打算
外遊の話そんなペースに乗らず聞き

島根県　小砂白汀

納得のゆかぬ鏡の中のみぎひだり
引き返えすこともあろうに逆止弁
まんじゅしゃげ枯れゆく秋のもだえとも
疑えば大地ふむさえたよりなく
雨降って固まるどころか山津波

松江市　柳楽鶴丸

気持よく妻の膝で耳掃除
昔々七つボタンで風を切り
水難も女難も僕にあるそうな
蝶になり貝になって女生き
人間人形塗って書いてまつげ付け

米子市　林瑞枝

憶測の飛んで挙式の日が待たれ
無聊また口動かせて尚太り
良策と決めた思案の軽い嘘
こんな孫欲しとつぶやく衿祝い
十年の無沙汰も逢えば血が騒ぐ

神戸市　小浜牧人

二三日過ぎて本当に腹が立ち
派閥の谷間で万年係長
つり球につられ空振りする父で
思い切り走りたくなる歯の痛み

祝堀江正朗氏路郎賞受賞

心眼でとられた今日の虹消えず

大阪市　河野君子

夫の愛へ心預けて病む日なり
お粥だけの瞳に空が青すぎる
こんなところに殿堂ありやボウリング
つけまつげ取れば邪心放たれる
セールスがひととき美人にしてくれる

大阪市　小出智子

病院が懐かしくなる程に癒え
両親と一緒に住んで里がなし
言分けをしてる自分が許せない
人を許すことを諭した子の微笑
丙午母は悲しい性をもち

大阪市　神谷凡九郎

時たまに意見が合うからまぎらわし
アフレコがあり人生の景変る
近眼乱視色盲遠視両眼が開いてても
つきつめてみれば不自由なる自由
足を喰う蛸を笑うた自己欺瞞

岡山県　池田古心

精根も使い果たして待つ浄土
戸籍簿に妻の名が載る式を挙げ
娘の恋が親の生活の灯を消せり
着せられた汚名敗戦程こたえ
一日中ブツブツ僻とは云い乍ら

島根県　堀江正朗

路郎賞眠れる筈のない夜汽車

（薫風先生に京都案内して戴いて二句）

嵐山その靴音になっており
そっと手に苔寺の苔愛撫する

（栞先生に奥様お手製を祝っていただく）

若さなお赤いチョッキに背を伸し
結い上げて妻の呼吸がはずんでる

東大阪市　竹中肖二

（北海道の旅）

旅始め石狩鍋に舌づつみ
記念写真美幌峠でメノコ借り
摩周湖が霧のベールをぬいで呉れ
夕映えにシャッターを切る屈斜露湖
霧深き美幌峠に自衛隊

東大阪市　竹中綾女

（北海道の旅）

オホーツクの海荒れ還らぬ島想う
いくつかのアイヌの哀話聞くも旅
阿寒湖の道でマリモの唄習う
夕映えに放牧の牛色を変え
機上から富士にかかった虹を見る

大阪市　橘高薫風

（山路星文洞氏へ）

めでたさは作句還暦喜寿の翁

（雨の作州大原で）

武蔵少年が見ていた雨垂れか
ギター置いただけでこの部屋よく響く
放尿の足下遠景滝懸る
中年や癲癇病みを絶えて見ず・

大阪市　不二田一三夫

なんだ坂こんな坂むかしは人もSLも
「お早よう」から始まる今日の創生紀
顔を見てミルクをビールと間違われ

寄席　柳家金語楼七十一歳で逝く（47・10・23）

ヤマシタケッタロー冥途へ行ってきまーす
発明も毛生え薬は成らず逝き

名古屋市　吉田水車

日中国交樹立（一句）

友好のやがて北京に桜咲く
人間も自動販売機も無表情
天国ですお楽になさい東海林さん

大陸川柳同窓会

三朝の雨しょうしょうと雨情の碑

松江市　中川晃男

暗闇に眼ひらいて神にふれ

驚いた拍子に生まの声を出し
D51の煙故郷の空を刷く
花ばさみ噂も一しょに切り捨てる
大阪市　福井野迷路

ぼけたりな恍惚とまでは行かないが
善意今胃癌患者をだますのみ
着想は奈落の底で練られてた
虚無主義と天地無用の小包と
島根県　藤井明朗

中国のムードへマオタイ酒に弱し
握手したぬくみ残して振り向かず
妬くひまもなし新婚の握手攻め
悠々自適へ孫の守りもってくる
姫路市　梅谿庵不酔

裏口に寄付と名付けて救いの手
親の恩知らず昭和のつけまつ毛
この先は男同志と口を閉じ
罪なこと知っててあきらめきれず恋
松江市　岡崎祥月

公害もないふるさとの美を誇る
美化運動俺も紙くず拾つとこ
口笛を吹く秋空も笑ってた
足跡をたどる巡視へ月笑う
岩国市　弘津柳慶

台風へ妻しっかりと指図する
所長室のぞけば軽いいびきかき
秘書の娘の応待いんぎん無礼なり
すぐ横で警笛が鳴り飛び上り
宇部市　石川侃流洞

河豚太れ太れ橙待っている
受付は親切だった片えくぼ
真剣な汗でピエロが笑わせる
怒ってる蟹の鋏は天を突き
大阪市　西出一栄

寄せ書きの顔がわたしを見つめてる
老人にされ恍惚の人にされ
深み行く秋を手水に知らされる
どんどろ大師（善福寺）にて10・8
ご先祖のお顔も知らず手を合わせ
倉吉市　奥谷弘朗

双肩に緑を守って生きる倖
知らぬ顔する友情あってよし・
初孫へ桃が流れた話から
表向き飾って小役人が生き
大阪市　天正千梢

時をつかんで昨日の通りにはならず
神秘な姿勢合掌で融和する
自分にだまされているのを知らなすぎ
持ち過ぎたのか冷たい人となり
笠岡市　木山遠二

「恍惚の人」を読んで

呆けたのへ隣の婆がちょいと惚れ
子も孫も泣いてはくれず成仏し
肩の荷が下りて涙が噴きこぼれ
昭子と云う女に老夫婦で惚れる

岡山県　大森娯句楽

靴脱げば孫が揃えて褒められる
米噛みに青筋立てた買い言葉
わだかまり解けた心へ虹の橋
錦装て先代の墓地探して来

富田林市　浅川八郎

三猿でゆくべく目下努力中
儂一人老衰じっとかみしめる
亡き兄妹吾子にも逢える今に直ぐ
おいづるへ俗名八郎それでよし

大阪市　江城修史

名門と言う名にほれた不倖せ
世話好きに経済力がちと足りず
美辞麗句敵か味方かつかめない
虚勢はる男の眼鏡がずれている

京都市　松川杜的

老夫婦ひそと鉢植のとうがらし
駅前の理髪店流石ガイドも心得る
結局は直線にあった美の極致
十年一日こんな言葉が今の僕

京都市　都倉求芽

育友会へ来ても儲かりまっかとは淋し
内職の妻の寝起きも知らず寝る
無理云いに来たガラス戸のえらい音
せんべい布団いやでも背が伸び腰がのび

大阪市　河井庸佑

井の中の蛙と知ったあわてよう
援助する積りで何やかや文句
一ことが多いばかりにいやがられ
他人なら言うてくれぬと文句言う

大阪市　児島与呂志

雑草は踏まれた倍に立ち上り
明日休むまだうれしさを早起し
大声でどなれば親はきくと決め
追うて来る相手が機械でなお恐し

富田林市　板尾岳人

捨てられぬ魅力を妻も山も持ち
惚れている弱みを山はつつかない
妻と山どちらも惚れて知った仲
欲のない山に似たのか喋べらない

大阪市　室谷徹舟

合理化で人振り廻す券売機
ともすれば凡夫心の生地が出る
冬服になって警官恐い顔
銀婚になっても遠い距離の妻

守口市　村田瓢太

這えば立て立てば立ったで手がかかり
片言も言えぬに孫の知恵の伸び
春に嫁り秋には貰うせわしなさ
しやれの意見説明をする馬鹿らしさ

宇部市　平田実男

諸物価が米の値上り待っていた
小の虫殺して日中手を握り
女心病気で痩たのも嬉し

後輩結婚

仕合せの花は二人の手で咲かせ

松江市　小林孤呂二

よくも蛇行したりその過去が惜しい
足らぬとこあっても部下だ頼もしい
生き甲斐が湧く妻の酌を受け
カラーで見る東京の空きれい

今治市　越智一水

秋語るその人がいて茶がうまい
気まぐれか萩はゆれつつ花が咲き
熟柿のあまさ太陽ありがたい
灯を消して妻と語るも秋なるか

鳥取県　清水一保

大農具並べて農家疲れ切り
柳友に書くペンもすらすら秋日和
存分に今日一日を生きた顔

神様を引張り廻して祭済み

倉敷市　藤井春日

握力の無い掌に胡桃音をたて
木枯しよ心して吹け職が無い
手にグラス心とけ合う琥珀色

文鳥へ何処へ

誰の掌にじゃれているやら文鳥の

大阪市　宮尾あいき

台風が朝顔への執着を断つ
若さへの執着爪を紅く染め
背負うには病夫あまりに重すぎて
早朝の仕入の背へ秋がしむ

東大阪市　宮西弥生

求愛のチャンス待ってる影法師
風の吹く芒へ絵筆寄って来る
日焦けまだ残る顔を塗りまわし
愛の手紙女の城を春にする

竹原市　時広一路

五線譜をはみ出し男対女
ここからは僕の世界がある強み
細くともそれそれなりの力瘤
一休みする気の腰が上げられず

鳥取県　鈴木村諷子

母を呼ぶ声夕空を紅う染め
うつくしう楽な農夫の穂が垂れる

こぼれ陽の日照時間へ栗むしろ
藁敷いて牛の心で横になり　姫路市　村上春巳

ボウリングごときを子供にしてやられ
衣替え早速赤い羽根もつけ
ほっとけば泣き止む孫を抱きに立ち
マイカーに馴れて札所で顎を出し　大阪市　中川滋雀

勢にのったひと言多すぎて
こわれゆく自信を隠すのに喋り
悔い淡く甘く切なく昼の月
妖精かも知れぬある日の妻強く　岡山県　出原敬一

傷口をなめて野良犬あすへ生き
印相は吉というのに客が来ず
里帰り居心地のよい隠居部屋
ボーナスも背丈も長男親を越し　岡山市　川端柳子

大阪弁うまく値切られうまく売り
わたくしの傑作子供とうたがわず
すばらしい口癖あなたになびく旗
合掌に照る日曇る日神の距離　岸和田市　葛城伊三郎

感情をぐっと抑えて置く受話器
ボスに似た態度へ距離が遠くなり

乾杯の音頭を取るは赤い鼻
年頭の辞がうるさいと路次を抜け　笠岡市　松本忠三

どの顔を提げて来たのと母の語気
もういいじゃないかは父の助舟
白黒がついて心の傷となり
神官の柏手を真似地鎮祭　愛媛県　村上旭童

彼岸花いけずする子ももう居らず
秋祭りこれから稲を刈る日和
同行四人釣舟の運不運
感情のない人でなし耐える年　松江市　恒松叮紅

墓参りここも過密の波が寄せ
握手してみたら人間らしい人
平凡なリズム永年勤続賞
片道は歩いてみたい観光地　竹原市　森井菁居

出直しを誓うファイトを買うてやろ
はよそれを言えと友情あたたかし
屈辱のページ破ってもやぶっても
とぼけては見たが心を風が抜け　広島県　高橋鬼焼

稲刈機稲穂の重さしらず刈り
青空へ干す物もなく妻のるす

もう一度あなたと呼んで返事さす
此のうそにのってくれそう好きな人
生駒市　草深酔升

あどけない顔でクイズのトップ賞
ゆっくりと遵法列車乗せてくれ
伊豆旅行にて

野天風呂立てば浜風そよと吹き
霧衝いて源氏が越えた戸田峠
大阪市　今西章雅

道路計画古墳をまたぐ青写真
おば米寿薬嫌いでおし通し
使い方知らぬか年金貯めている
愛してるは云わず迎えた金婚式
西宮市　藤村〆女

虫鳴いて一人ぼっちの夜が更ける
孫の黙秘権涙が二三滴
苔の花こぼさじと掃く米寿の母
老人が前に立ったで目をつむり
竹原市　小島蘭幸

かって愛した女が嫁ぐ秋の天
貯金またおろし結婚おめでとう
大学を出て冗談がわからない
ぼかしてるからもひとつエロチック
倉敷市　松下梁水

冗談を逆手に取って居直られ
仕返しへ兄貴は一つ余計蹴り
旧友県展南画の部入選

道ひとすじ今日一輪の花が咲き
新宮市　川上大輪

飛ぶことも知らず停年まで歩き
母の皺僕を育てた記録かも
空白の目記に残っていた妬心
化粧して女は次の嘘を待つ
島根県　大森孝華

我が土と思えば愛し箒の目
底知れぬ千尋へ握手賭けて見る
すっきりと素顔の見たい日を約し
ふす間紙替えて生活にある歩巾
堺市　高橋千万子

秋半ば背をあずける壁の冷え
心の中見られる酒と知らずのみ
好きなよにしろとはすでに負けている
不満充実袋のようにやぶれたい
倉敷市　谷井扇水

傷心の涙は見せとうない鏡
愛妻の腕浅漬けの色で褒め
適任という振れ込みで左遷され
点滴へ千羽鶴さえ揺れが止み
大田市　藤田軒太楼

支度したところへ掛る詫電話
悄然と帰れば犬までじゃれつかず
持前の地声もいつしか鳴りしずめ
控目にしておこ厄介背負いそう

大東市　土岐トク子

分家した寺の重荷がのしかかる
買ってでもして見よ苦労は愛のむち
帰らざる河を深夜に観る孤独
寡婦に後家かなしからずや未亡人

堺市　伏見茂美

今日だけの恋でもしたら秋静か
塾へ行く子供に秋の暮れ早し
紅葉の命の限り燃える色

戎橋にて

色町という名が泣いているネオン

大阪市　黒田真砂

真珠の光り心の垢をさらけ出す
場違いの一語が座を白けさし
紫が似合う年だとふと佗し
我が影も孤独の影もまた重し

大阪市　西川誓二

愛情が四分で六分が親の見栄
惜しい哉母系を受けた目鼻立ち
影身の世話にほだされ罪作る
（愚息が結婚）

親まで拍手させてケーキにナイフ入れ

東京都　増田次章

底抜けに明るい聾唖小学生
俺だって一歩もひけぬ線があり
正直を曲げぬ男の影孤独
大物も票は握手という意識

富田林市　和田維久子

涙して同じ温さを握り合い
「今浦島ですね」とことばが続かない
四十八年振りお下げ髪に戻って甘え
顔色をほめて癒せられたとも云えず

堺市　吉岡青香

こうなれば懐しくもあり八路軍
消息は未だなし風音聞く夜半
形通り酔どれの無理聞くはしご
ひと寝入り未だコーロギは鳴き続け

島根県　中島英子

新聞へ妻いつからか目鏡かけ
友情を越えてほのかな恋心
フラッシュの中で握手ぜめにあい
番犬と知らず白杖身がまえる

鳥取県　谷無閑

埒のない話題も票のうちにつれ
恋は自由不倫なんて笑うまい
教育のひずみが妙な子を育て

立場上困ると裏で手をにぎり
倉敷市　竹内翁童

うそで固めた自画像のくずるる日
横ばいのままで人生暮れている
住宅ローン貧乏人の夢を喰い
朝風呂をたてて日曜満ちたりる
呉市　槙田英詩

髪洗う妻が女に見えてくる
再出発今日のリズムを忘れまい
妻子ありて地下足袋臭い足誇る
俺も齢などと少うしなまけ癖
大阪市　河股緑水

こと金の話になると目を瞑り
手洗いを済まして自分取戻し
振向いて欲しい女は横を向き
二回目の恋は大人になっていた
東大阪市　斉藤三十四

釣場への道を求めて枯葉踏む
鍼釣紅葉の渓もたのしみつ
秋空へリールの音も心地よく
第二の人生目覚に励まされ
八尾市　飯田悦郎

年輪には勝てず病葉まだつづく
春に咲く今日の落葉を疑わず
平凡に生きながらえて来て落葉

草枯れた所に泉現われる
松原市　玉置重人

豊なる個性男が無口です
ポックリと死んだと老母けなるがり
里帰り又何やらを持ち帰り
禁煙の決意もう一本もう一本
大阪市　木村水洞

裏切った友の不幸をいたむ日々
ささやかな幸せビールの酔い心地
生きている証拠長屋の喧しさ
平田市　久家代仕男

体験談などと何かで見た記憶
ひら仮名を逆さに読んで旅の駅
保証人辞退する気の酒を出し
鳥取県　渡辺菩句

もうミニの膝見えぬ電車で眠る
言葉ひとつちいさな悪がすぐ芽生え
宝くじ当らねど事故に突き当り
高槻市　山田季賛

稼ぐ幹線に公害が残される
明日は明日今日は今日だと稼ぐ案
今朝の事故結局は示談で終り
兵庫県　河原みのる

生き残るほどに命が尚惜しく
落ち穂ふむ慣いどうやら性となり

天高し汚職の腹も肥ゆるとき　八尾市　古川鶴声

女房の指図で動くも久し振り
解散の噂で株価動揺し
解散後それから野望の組直し　大阪市　飛田好一

夕立の気配出足をためらわせ
オリンピック
世界新人の力の限りなく
台風のそれてそのまま秋気配　鳥取県　森田布堂

スモッグに耐えて天守閣毅然
台風接近もう御破算をして退社
肩書がついて故郷の墓参り　橿原市　岩井本蔭棒

米余る二百十日の良い日和
老朽の駅舎に鳩の住心地
得心で雌に食われる虫が居る　川村好郎

★

いのち継ぎ足され足されて古稀の秋
昨日には触れず夫の古稀祝う
この一瞬久遠をふくみ日脚延ぶ
秋の風去りゆくひとの音と聴く
用意した逃げ口税吏突いてこず　若本多久志

敬老の日（一句）
敬いの言葉そらぞらし菊見入る

文楽にて（二句）
忠兵衛の分別くさい眉動く
西鶴の恋太棹でしぼり出し
スピーチは快調満ち足りて壇を降り
ここいらで拍手やんわり水を飲む　北川春巣

排気ガス木犀の香も脅かし
高級と付きマンションの値が上がり
週一度無料医療の世話になり
煉炭火鉢ゴミモヤシ器に落ちぶれる

円空・木喰展
展観の仏像拝むものとせず　西尾栞

コンコースの懸崖の影で待ち合せ
もろもろの希い捨てたり日々平和
新聞はあな呪わしき文字列べ
それとなき磨崖クルスの蔦紅葉
蒸発をしたい話も十二月　菊沢小松園

老いてなお女には職ありあまり
齢すでにストリップには向かぬ膚
遁げられんように握ってる手もまじり
勝閧を上げるは雌鶏ばかりの世
叱られても女へ四季の狂いなく

川傍柳初篇研究（百十三）

前田喜代人　川端柳風
故岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

669　気どくなる餞別笠と柄杓也　　嵐弓

清＝餞別に柄杓とは？

藤井＝親が死んでその冥福を祈るために、霊場を巡拝する巡礼は、笈摺を背に菅笠を戴き、脚絆をつけ、ワラジをはき、手には柄杓を持って出た。人によってはすぐ役立つ笠や柄杓を、現物を餞別として送ったろう。したがって巡礼に出る子に与える餞別ぐらい気の毒なものはないとの句。

川端＝賛。「気どく」は気の毒ではなく、「奇特」の宛字とテキストの脚注にある。

高須＝柳雨翁は伊勢神宮といっているが、奇特な餞別が「笠と柄杓」では然らん。

前田＝「奇特」は、並々でないこと、たぐいなく珍らしいこと。巡拝にしろ、お伊勢参りにしろ「笠と柄杓」の餞別は奇特である。

丸＝賛。親の冥福を祈るというよりは、瘡毒などで霊場巡りに出る場合ではないか

岡田＝賛。

670　俗おどし法印光る袈裟を掛　　五扇

清＝川柳大辞典によれば「法印」は山伏の異称としてある。主題句も引用して「金ぴかで大衆を」という註を付している。この説に従っておく。

藤井＝法印は広辞苑によると、法印大和尚位の略で最高の僧位とあるから、大僧正ぐらいでいいのではないか。大僧正が俗おどしの金ピカの袈裟を掛けている。そのこけおどしをやゆしたまでの句。法印は武家時代には僧に準じて、儒者、仏師、医師、画工にも称号として与えられた。また山伏の意もある。

高須＝地方廻りの修験者を、俗に「法師さま」とよんで、いろいろなご祈祷などをしてもろう。その俗の法印さまが、いざ御祈祷となると、妙に光る袈裟などひっかけるのを「俗おどし」といったので、すこし説明的であるが、面白い句である。

前田＝「俗おどし」とあるから、大僧正でなくて、山伏の方が似かよっている。

丸＝高須説の如く見たい。

岡田＝同。

671　場所がらでとりさい人も五百石　　葉十

清＝浅野長矩が松の廊下で吉良上野を斬りつけたとき、長矩を後ろから抱きとめたのが梶川与惣兵衛、この仲裁の功によって、与惣兵衛は五百石の加増を得た。場所は松の廊下、出来事が出来事であったため、ただの仲裁とはちがって、得た報酬も大きかったのである。

高須＝「とりさい人は取り押さえた人で、取り押さえ人のつまったものであろう。場所柄であるから「五百石」というのだから取り押さえた梶川本人も五百石ということで、加増の五百石は、まだ勘定に入っていないのである。

岡崎＝五百石は加増の五百石であろう。

丸＝「とりさふ」は取支ふ、争いの間をさえぎってしずめなだめる意。「とりさい人」はそうしたことをする人。句意は礎稿のとおり。刃傷厳禁の場所が場所だけに……

岡田＝諸説につきる。五百石は加増。

672　**金屏のうしろ酒だの醤油だの**　　一　甫

清＝六月十五日の山王祭と九月十五日の神田祭には、商家は見世の正面に金屏風を飾って親戚縁者を招待して馳走する。その馳走用の酒や食物が、立派な金屏風のうしろに雑然と置かれる。金屏風と雑然の対比で祭のにぎやかさを表現した句である。

藤井＝賛。店頭を金屏風で飾り、その裏は雑然と雑貨が山積している。オリンピックの東京そっくりで面白い。

高須＝金屏風と馳走のとりあわせで、前出「賑かさ家に勝たる屏風たて」「金屏風立てると猿や象通り」などの山王祭である。

丸・岡田＝賛。

673　**てうし言葉で臨終をすゝめてる**　　一　甫

清＝勘当されていたどら息子が、親の死に目に銚子から帰って来たものか。しかし「臨終をすすめてる」の意味がわからない。

藤井＝すすめてるは「安心して往生して下さい。もう決して不孝はかけませんから」と、どうせ死ぬときまったからは、極道者も心から大往生をすすめていることであろう。道楽息子の長い遍歴と、たった十七字でまとめている点で、蕪村の「お手打の夫婦なりしを更衣」の句に似ていて佳句である。

川端＝銚子言葉になるほど永く住みついていたとすると、本当に改心して銚子で世帯でももったのではあるまいか。

高須＝銚子言葉とは、銚子から帰った息子ということを現わすための表現で、長く銚子にいたためなどと考える必要はあるまい。また「臨終をすすめる」という言い方も「サア死になさい」ということではなく藤井説の通り「安楽往生をせよ」ということで、親不孝だった息子が、親の臨終にかけつけた句である。

大声で今銚子から着きました　　安永

岡崎＝**清**・藤井説組合わせに賛。やはり銚子に長く勘当されていた息子の意味にとらないと、句のおもしろさが浅くなる。

丸＝銚子言葉については、高須説のように逆に勘当息子をきかせただけのおかしみと軽く見ている。

岡田＝賛。「臨終をすすめる」は皆さん芝居などで御存知。「迷わず成仏なされましょう」の場面。

674　**こゝへも半てう下駄をちっとみせな**　　門柳

清＝仙台藩伊達綱宗が豆腐屋に与えた伽羅の下駄。この伽羅の下駄を見たさに、欲しくもない豆腐を買った客が押し寄せる。すでに数句でてきた伽羅の下駄の句。

藤井＝賛。昔の人は暇だ。よくもこう同じ題材をひねりまわしてうんざりする。いささか豆腐に食傷気味である。

川端＝下駄を見るのが目的。

高須＝山谷の豆腐屋の思わぬ繁盛を詠んだ句。

下駄を見せねえときらずを買いに来る　　一〇・28

下駄を見にいらぬ豆腐を買いに行き　　四・13

岡崎＝賛。

その朝は豆腐六十二てう売り　　榜二7

丸・岡田＝諸説賛。

北京桃源境

東野大八

田中訪中による日中復交のニュースにわきたつ今年十月、連日のように視聴覚いっぱいにクローズアップされる北京。私にとってのこの街の風物こそ、この生涯にとって最も因縁浅からぬつながりをもつ対象なのである。

真珠湾急襲の歴史的第一報の日米開戦を耳にしたのが、王府井の華北電影公司（満州映画協会の傍系）だし、現地召集令状によっていまの家内と急拠めおとのサカズキごとをしたのが北京神社、そして北京站でその新妻の涙を後にし、軍服をまとい死に損いの挙句、たどりついたのが北京陸軍病院（北京清華大学）であった。そしてここで日本降伏の玉音放送を承わり、現地除隊第一号でそこから懐しの新妻のまつ北京城内のわが家へ復員。三々九度からまる三年ぶりで、晴れの初夜を迎え夫妻のチギリをかわしたのもここだ。そのとき新嫁のやわ肌を哀しやかき抱くのは右腕一本だけ。その朝、窓外の槐（えんじゅ）の大樹の中で、山鳩がくぐもった声でしきりに啼いていた。敗亡の祖国に身は隻手、そして今は異国の空の下行く末厳しい世相の底で、われら二人如何に生きんとするや、ああ哀妻よ—私も復員帰りで若かった。それからのつかの間の北京は、私にとって一層密度の濃いものになっていった。

日本人でありながら国府軍の大佐となった一味の東天紅という結社に加り、傍ら蒙疆八路軍に潜入する日本人二十人の送り出しに奔走したり、そのことで北京やくざや、日本人馬賊の顔役との交友が生れたと思ったら、元スパイだったという印度人の出会いなど、話せばアクションドラマの筋書となりそうなことばかり。中日復交の年を記念して、今回はその北京西郊にところ払いをくった日僑巷談の一幕を書くことにしよう。

終戦後半年近くが過ぎたころおいから、北京城内に住む五十万人の邦人は、逐次帰国のための集結施策が進められていった。

血の気の多い私に手を焼いた妻とその父は中華航空社員だった父の弟夫婦の世話で、北京西郊の中華航空社員寮に同行を強いた。

その寮は八畳二間に、キッチン、風呂つきで玄関も人並、それが一むねでそこに四家族が押し込まれた。付近には国策会社の各社員寮も点在していて、小学校や元憲兵教習所などの公立施策もあったが、城内からところ払いを食った連中が日毎に詰めかけてきて、至るところで人間がふくれ上り、ついには空場や大通りの随所に半地下壕式のアンペラ作りのカマボコ小屋まで建てはじめた。土匪や兵匪の片割れや、土民の悪いのが徒党を組んでそうした邦人の集団を襲うことが瀕発し、われわれは自警団をそれぞれに作る自衛策を講じた。私の寮も同様で、私は復員者というので三日に一度は徹夜勤番が回ってきた。立場上、義父の分も引受けねばならなかったからである。

或る日、北京鉄道局の資料課にいたKにあった。局の新聞記者係りをしていた同年輩の飲み仲間だ。彼は大きな箱を担いでいる。

「一体、何やってんだ」

これ売ってんだと、そのフタをあけるとおはぎがいっぱい詰っている。これを空っぽにすると六百円儲かる、といった。面白そうだ手伝ってやるよ、と同行した。だが片腕の私が持って歩いたおかげで、おはぎが全部つんながってしまった。おやおや、これでは売りものにならないよ、とお客の気さくなおばさんがもとのように丸めてくれたが、大きさが

半分ほどになり大損。

華北運輸で運転手やっていたのが会社で一台くすね西郊―西直門間の自動車を動かしていてすごく儲けていた。片道二百円の料金だが車がトラックで客はほうり上げられたまま八キロ余を立ちん棒か、ムシロの上でゴロゴロしなければならん。それでも日僑役員の腕章を持っているのでそれが役に立ちいつも満員の盛況。

スピアという安タバコが一個百円、米一斤が六百円というインフレだが、彼にとっては大変な稼ぎである。彼は北京川柳会へ三度ばかりきた川柳人だけに、私とは顔なじみだ。それだけに時折の城内行きはロハにしてくれた。

或日、彼は西直門内のめし屋でパイカルを私に奢ってくれたが、一つの相談を持ちかけた。米のヤミで夜半、城内の東から西へ運んだ駄賃に三俵のカマスをくれた。こりゃあ大変な発財と大喜びしたら、三俵のうちの一つがとんでもないげてもので、捨てるわけにもいかんが、どうにかならんかという。一体、そりゃあなんだというと黙ってそのめし屋の裏の物置へ私を案内した。汚ない野菜の山の片隅にある日本製のカマスの口をひらいて、私はアッとばかりに苦笑した。それはゴム製品の小さい丸いものでぎっしりいっぱい、一つをとり出してつまんでみると、忽ち長く袋状になった。軍用のルーデサックじゃあないか、うん、少しならうちで間にあうんだがこうど盛大ではなんともコナシがきかん、と彼はヒゲ面をなでてうんざりの態だ。よし任せろ、と私はいった。

北京居留民団で元新聞記者の顔をきかせた縁で、私はそこの課長だった民団役員に、抑留生活の楽しみは男女間のアレ一つだが、万一不始末ができたらのその気づまりを解放するにはこれに限る、と力説した。で、どうするんだ、というので、日僑本部でこれを有料で配給しろ、といった。卸し値はコレコレあと一切君まかせ。お役所で働く人間は、こういうところはバカに話せる一面があるものだと悟ったのはこのときである。役人の子は親のにぎにぎを見習って古川柳を作り出す。

かくてカマス一ぱいのゴム製品も立ち所にカタがつき、二人はかなり手応えのある金をつかんだ。さて喜んだのが華北運輸のヒゲ面だ。いいところへ案内しよう「おれは雲助、ツウのツウ」だ、とわけのわからんことを口走って、お手のものの乗用車（トラック）で西郊もずっと万寿山よりのとある洋館に私を連れこんだ。なんとその建物は、今様東映のやくざ映画を地でいく一大鉄火場であった。

大広間は豪華なじゅうたんで、その真ん中に青畳二枚を積みあげ、白いシーツを張ってツボフリと中盆がいた。昼は本引き、夜は丁半だそうだが、真昼間から五、六十人の男女がひしめき、もうもうたるタバコと酒と体臭が濃いモヤのように立ちこめている。

永年大陸で営々と築きあげた巨満の富も利権も身分も、今やうたかたの露の如しで、身はリュック一つに千円の金に尽きる。どう全財産を処分してみたところで持って帰れる金ではない。かくて行きつくところは東の間のこの鉄火場だ。第一、ヤボな警察や憲兵もすでに影もないのである。

「どらん、盆ござの左貸元はここの警察のデカ長で、この間は署長もきていた。一枚剝げばデカもヤクザも根は一つで、貸元が相手に卑下するのでつくのはいつもデカ側だ」

賭場を根城の女たちはいずれも海千山千の粋筋ばかり、あたりの小部屋はその仕事場、遊び場と知れるとんだ岡場所ムードだ。こいつはあのゴム製品こそ打ってつけと思ったことだが、まさに御当所は飲み、打つ、買うの桃源境と知れた。

戦争は時には負けることも必要らしい。なぜなら外地での敗戦においては、期せずして富の均衡が全きまでに行われ、身分上下の区別なく、人間生身の自由さがむき出しとなってでてくるからだ。しかしこの場合の丸裸の自由さというものほど本能の虚しさを遺憾なく露呈するものはない。私は今も人間ほど身勝手なものはないと思うや切である。

古方手書き句集　送料共八〇〇円

西出一栄句集　ねつくれす　送料共六〇〇円

西尾栞句集　水鶏笛　送料共六五〇円

47年度

選考委員
中島生々庵　川村好郎
北川春巣　正本水客
西尾栞　戸田古方
菊沢小園　大坂形水
若本多久志　橘高薫風
（順不同）

島根県　堀江正朗
瞼閉ず　耐える苦痛が洩れぬよう

倉敷市　水粉千翁
耐えて来た拳を悔いもなく開き

香川県　三井酔夢
余生など牡丹は知らぬいさぎよさ

松原市　谷垣史好
マンネリを断たん木刀素振りする

富田林市　岩田美代
感情を押える畳冷えて来る

枚方市　宮川珠笑
ローン無事払えますよう地鎮祭

笠岡市　木山遠二
病気せぬ薬をあれもこれも飲み

大阪市　小出智子
人の持つダイヤを愚かと思うまい

兵庫県　遠山可住
オートバイ十八歳の音で来る

倉吉市　奥谷弘朗
引越しの後髪引く桜草

桜井市　岩本雀踊子
明日捨てる子猫がめしを食べのこし

西宮市　島居百酒
緑十字掲げて自然が破壊され

大阪市　有信新之助
魂の重さ精霊押してやり

尼崎市　高津徹也
湖の色に絵具の躊躇なし

東大阪市　久米奈良子
手の冷えをあずけし夢をいとおしむ

米子市　八木千代
泣きすぎる女が通夜に来て白け

島根県　小砂白汀
透明なガラスに思考力がなし

香川県　三井酔夢
すさまじきものに女のうす笑い

大阪市　木多柳志
父の日の父は木曽路の旅に居り

大阪市　有信新之助
さっとくるライターに気が疲かれ

松原市　谷垣史好
閏年一日さみしい日がふえる

藤井寺市　吉岡美房
コップ酒両掌に包み明日がない

倉敷市　田垣方大
車椅子ある夜走った夢を見た

富田林市　木村弥栄子
胸に住む人ありきれいに女老け

堺市　河内天笑
もて過ぎた夜はプスッとして帰り

青森市　工藤甲吉
働けば叱られそうな国になり

島根県　堀江正朗
音に生き音の多きをもて余し

和歌山市　垂井葵水
背を見せるとき崩れてるサングラス

呉市　槙田英詩
雄芯に囲まれて女の髪匂う

大阪市　木多柳志
猫の足拭いてこの人子を産まず

大阪市　西川誓二
桑食べて蚕運命にさからわず

倉敷市　水粉千翁
宝石を蹴っておんなの道けわし

大阪市　小出智子
放してやったこおろぎらしい声で啼き

八尾市　高杉鬼遊
役不足いわずに城の石ひとつ

岡山県　出原敬一
自嘲して夫につくす性も愛

藤井寺市　吉岡美房

哀しみの終るときなし女生く

姫路市　隠岐不酔

横断の母の背中で旗をふり

広島県　高橋鬼焼

蝶々のつかれ地蔵の肩を借り

西宮市　若林草右

落葉にも居心地のよい隅があり

八尾市　高杉鬼遊

時計ふってみるお前も疲れたか

倉敷市　小野克枝

刺の無いバラになりたい割烹着

大阪市　小出智子

背伸びしている爪先の痛いこと

大阪市　不二田一三夫

落丁あり　乱丁あり　人間です

大阪市　吉田圭井堂

直ぐ補正組める政府が羨やまし

富田林市　岩田美代

夕やけに融け合わぬままの雲もあり

尼崎市　高津徹也

息づくもの夢あるものよ草の芽よ

倉敷市　水粉千翁

母をさす指から知恵がのびてゆき

島根県　小砂白汀

風受けて廻るほかなし風ぐるま

倉敷市　野田素身郎

敬遠の四球のような辞令が出

富田林市　木村弥栄子

元の鞘汚れた足袋を履く思い

京都市　松川杜的

一陣の風が緑を濃く淡く

和歌山市　垂井葵水

つき放す言葉も愛も持っていず

堺市　河内天笑

杉木立いま満月を差し上げる

▼以上の句は最終選に残ったものです。以下は中間発表三回の中から、二回以上の候補句は一句、四回以上は二句、六回以上は三句編集部選で追加発表しました。なお選考委員でも佳句は推薦してほしいと思います。

高槻市　福田丁路

クシャミした尼僧の顔のあどけなさ

大阪市　不二田一三夫

「ある男」―そんな記憶にぼくもされ

喪の家にドラマの後編はじまりそう
松原市　谷垣史好

革命に縁なき顔よ満員車
大阪市　有信新之助

この寺も何処かへ行けというネオン
富田林市　木村弥栄子

添え花を変えれば松の緑映え
その罠に女の業は住みついて
倉敷市　小野克枝

見えすいた嘘へうなずく日をおそれ
証し欲しむらさきの炎の消ゆるとき
捨てられる猫が鼠を捕ってきた
富田林市　岩田美代

空虚感南京豆はかんの底
不器用に札を数えて示談すみ
追憶のこのへんからが腹が立ち
八尾市　香川酔々

私の音ききたし池に石を投げ
大阪市　本多柳志

絞れば血潮したたりそうな社会面
香川県　三井酔夢

リフト孤独砂丘に落ちて行く親子

幻想のレールが光る走らねば
竹原市　森井菁居

はしやいでも孤独　酔い痴れても孤独
青森市　工藤甲吉

ひねもすの氷雨ひねもす火を抱かせ
一枚の舌は不便なものと知り
島根県　堀江正朗

妻といて心わびしい雨の音
腹立ててみても相手は妻と子か
和歌山県　垂井葵水

絵馬揺れて乾いた音が吹き抜ける
お世辞抜きでという嘘の美しさ
鳥取県　鈴木村諷子

女の眼死火山に火を入れんとす
大阪市　小出智子

春愁の膝に重たき夏みかん
高槻市　若柳潮花

待つことに馴れて女も歳をとり
石川侃流洞

元気でなだけで通じる父の愛
米子市　八木千代

切り替えもソフトに嫁の城となり

さりげなく見守る母の灯も消えず
岸和田市　高橋操子

たいこだけ聞いて祭の台所
札幌の雪　心地よく降る画面
高槻市　福島鉄児

ヌードカレンダー貰い簞笥にしまっとき
宝塚市　傍島静馬

おそるおそる出したオカラがお気に召し
八尾市　高杉鬼遊

外人の方が詳しい法隆寺
寡婦へ吹く風は北風ばかりなり
京都市　都倉求芽

曲がろうとしないで水が迸しる
東京都　増田次章

宝石の売り子遠くの方に立ち
大阪市　天正千梢

沢山の人が歩けば道になり
大阪市　金井文秋

親切な心の裏は思うまい
香川県　岡田拳法

守らない規約激論して作り
兵庫県　遠山可住

老夫婦時計も好きなときに鳴り
下関市　志賀木石

己が城枕にさざえ焼かれたり

（順不同）

（一般の部）

飾り壷　一枝さされた事もなし
島根県　谷岡芳枝

亡母点となりて心の海に佇つ
岡山県　嘉数千代香

雑然とテトラポットは役に立ち
大阪府　玉置重人

いじらしいほどに自分を出したがり
岩国市　村井酉合

イメージチェンジそうですめがね買う
八尾市　高杉千歩

庭下駄を息子が履いてゆるくなり
松山市　谷のぶお

輪の外でバックボーンを持ちつづけ
島根県　栂みどり

引く波に貝殻コロコロついてゆき
藤井寺市　吉結百水

高知市　竹崎寛

笑おうとすれば笑える庶民です
備前市　武内雅堂

目覚めてもめざめても戦車が追うてくる
大阪市　小谷葉子

遮断機下りて構図ぬりかえる
島根県　槻谷一葉

散ることを知らぬ造花の冷やかさ
八尾市　高杉千歩

月の雫かポトリと一つ雨上る
新宮市　熊野溪水

受け付けの笑顔が消えて社のピンチ
吹田市　吹田三郎

父の日も父は泥田を這いまわり
竹原市　三宅不朽

父と子のアメ玉ほのぼのと対話
大阪市　阪上十止庵

美しい耳に偽りささやけず
島根県　堀江芳子

ほんわかほんわか夫と喜劇の幕があく
竹原市　脇本政己

藁屋根のつららに童話ぶらさがり
大阪市　小谷葉子

着物の躾とり未完の恋を追う
島根県　榊原秀子

平行線きびしいものをうちに秘め
岡山県　嘉数千代香

つまずいた石に言葉のある如く
和歌山市　ふきあげ虎城

耳たぶの羞恥を知らぬイヤリング
守口市　岸本豊平次

嫁が来て養老院を禁句にし
岩国市　村井酉合

人妻になって荷風を読みかえし
氷見市　関美子

中年の長さに耐えるコップ酒
和歌山市　垂井千寿子

天罰を分け合う人が居る安堵
八尾市　高杉千歩

梨になる花の盛りに巡りあい
竹原市　三宅不朽

飲むだけの友であったと知るベッド
名古屋市　吉田文枝

老夫婦なにかというと二人立ち

（順不同）

近作柳樽

米子市　福島城山

愛破局生きるテーマをさがす旅
病窓の雲ちちになりははになり
愛きしむ男の胸に風が鳴る
青春の涙のむこうに明日がある
失職に爪さきまでも寒くなる
ついていてあげねば駄目な人と添い

岡山県　嘉数千代香

入陽沈む今日のひと日を消し乍ら
嘘一つ包んで冷たい風となり
まっすぐに生きて生活の曲り角
向うばかり見える目鏡でけつまずき
うっぷんを晴らせば空しさだけ残り

大阪市　阪上十止庵

学歴が惜しい二軍の球拾い
六十の悟り　女はこわいもの
フロ代値上げ靴下洗ろてこましたろ
出世しすぎてわが子でなくなる

菊沢小松園選

百円じやよい顔をせぬ子のあんま

和歌山市　秋月宏方

句を詠んでわれは老化の支柱とす
人生を無事故で終るかいしよなし
苦も知らず三食昼寝付の猫

横井庄一さん結婚

一億の拍手の中の高砂や

日中共同声明書調印

七億の友ときようから手をつなぎ

岩岡市　村井酉合

これだけがせめてわたしに出来ること
耐えているうしろ姿と気がつかず
おおかたはオアシスとして妻を撰り
逢いたさをたて糸にして日が流れ
雲流るわたしがいなくなった日も

松山市　谷のぶお

マニキュアのそろばん何だか違いそう
へその形も美人の条件

着物教室着物代にはふれぬなり
魚死す貝死す水平線光り
動物園で無邪気な大人となっている

茨木市　日高文甫

名門の重みにたえるひとの貌
息子より小さいパパは腹で勝ち
初恋をPTAで聞いてくる
給料を押戴けばウチのもの
おとうふをエレベーターで買いに降り

守口市　野呂杜月

見る人が見れば判ると邪魔な石
錦鯉冷たい肌をふれ合って
休み明け手に魚の香の残るまま
菊の香がむんむんしてる部屋で病み
麗人の髪に殊更散る枯葉

今治市　真山国彦

身構える女哀しや縁遠し
入れ墨と肌が触れ合うサウナ風呂
幼稚園親まごつかす事も聞き
埋み火の煩悩だからなお困り
車窓から天守が見えて下り仕度

大阪市　児玉節子

相合傘誘った方の肩が濡れ
宴果てて夜行に一人新任地
自惚れをベールで匿す女なり
噂の種煮たり焼いたり週刊誌
報道のカメラに難民もの言わず

大阪市　小谷葉子

北風に長髪逆らうしか知らず
紅椿おちて心に残すもの
好き嫌い直してあなたの胸の中
三八キロなに満たすのか地平線
かしずいて見るものあり夕焼ける

羽曳野市　大峠可動

希望の灯母の心のかたちして
直線が続き凡夫となる愚か
歩き出すリズム君にも贈ろうか
少年もやがては生きる意地を張り

尼崎市　中谷利美

人が人裁く矛盾を歯がゆがり
疑ぐっているからそんな無理が言え
七分粥医者も折り紙つけてくれ
女房の寝顔に苦労させた皺

氷見市　関美子

つけのきく飯屋も出来て縁遠い
ババ抜きの知恵に簡易漬物器
その愛は私だけの砂の塔
死ぬ自由だけを残して押しつまり

東京都　宮崎美津子

東海林太郎さん逝く（一句）

まわり舞台こんどは平和の守り歌
子のくせを責めて気がつく親のくせ
仏さんだまっているから後になる
宝くじ夢消す夕刊待ちわびる

竹原市　三宅不朽

部屋の隅みつめていたり夜の秋
人形になってあげます勲章よ
無精卵の歩巾に揃う出勤簿
輪の中に私と書いてする自問

笠岡市　高木桃里

あちこちの飲みづれが来て秋が酣け
二本目はちと熱くして差し向い
お小言が出ない間を酌いで立ち
女道楽し尽してポクリ逝き

大阪市　堀口欣一

建築士調理士もいて核家族
良識は岩波書店の名を変えず
創業百年インスタントとなった味噌
日中を結ぶやっぱり箸と筆

守口市　岸本豊平次

嫁もらうまではあまえていた息子
金ぶちの眼鏡力はなかりそう
咽もとで止めた言葉の苦笑い
心にもない音を立て戸が閉まり

島根県　堀江芳子

立ち話なにやら声が小さくなり
いいところばかり子無しの目に映り
儲けにもならぬ話へ力こぶ
指すこし荒れても嬉しかっぽう着

竹原市　脇本政己

資本主義に荷担している貯金する
カンナの朱男心がふとうごき
善人のしるし結婚式をあげ
ＰＰＭＰＰＭに恐わがらせ

今治市　大本バット

しあわせを金と物とは持って来ず
限界を心得て居て駄々をこね
二人して三人産めぬ文化国
買うて来る事で維持するパパの株

今治市　伊藤一郎

度が過ぎて哀れボス猿射殺され
意地ばかり誰も得せぬ後家を立て
脱ぎますの力会社を建て直し
打算とは好かれた事の無い男

今治市　今井松花

今此処に生きて居るから腹が立ち
身構えて見ても矢っ張り十二貫
昼寝てた犬が今夜は唄ぎに来る
君が代は血の匂いせぬ国歌なり

今治市　原田輝親

女にも堕胎す権利と産む権利
トンボ眼鏡外した方が美人です
四点セット結納金を軽く越え
ビールだって冷し過ぎたら泡も出ず

鳥取市　大塚　豊生

墓参りいつかは私も来るところ
屋上があって月見のお膳立て
京の味足で歩いて肌で知り
放したらみどりの山へ飛んで去に

島根県　安達小茶坊

連帯で果す責任美しい
立寄ったわけを帰ったあとで知り
なぐさめの言葉落目の身にしみる
知らぬふりしてかあさんの思いやり

和歌山市　樫村ふみよ

苦労抜けたら空しさが待っていた
気がつけば親の二の舞ふみ初め
染めぬ髪世間が気にしていてくれる
二人切りになって言いたい事言えず

備前市　武内雅堂

肩の凝りほぐす人妻かも知れぬ
群衆の眼に犯される十二月
五十坂越えて人妻飢えてみえ
人妻の素足の汚れ見てしまい

大洲市　堀内暁風

結果から見れば迷っただけの損
御手植の松も台風には勝てず
酒癖を知ってて相手にしない妻
初対面それで好く人好かぬ人

竹原市　生信笑子

母という貫禄つけて友来たる
負けてはならじ貫方と共に歩くまで
あたたかい目を意識して恋進む
満月へ山は微塵も動かない

島根県　榊原秀子

人間不信その時花はきれいすぎ
なし終えた安堵女は酒にせす
祈れば祈りに響く鐘の音
倖せらしい二人　親とはそれを未だ案じ

大阪市　小谷清女

出る処へ出るわと妻も負けていず
ひねくれた枝が果報な床飾り
孫の世話帰れば早速医者通い
明日も又働く足に灸をすえ

尼崎市　小林文月

恍惚の人幸福と思って見
喜寿迎えまだ恍惚になれず生き

社会福祉功労者知事表彰

以下同文でも知事は表彰したつもり

橿原市　西本保夫

ささやかな抵抗課長に背を向けて
子会社の社長名刺をそっと出し
学歴へあきらめムードの平社員
米子市　増田竹馬

一とすじに生きよと名無しの孫を抱く
ハンドルを持たぬ子いつち親孝行
博物館を出る童心へ秋の空
須賀川市　平栗金太郎

お神輿もトラックに乗る人不足
初孫の何時覚えたか人見知り
老醜を見せまいとしてカラーシャツ
羽咋市　三宅ろ亭

すすきの穂よく秋風を知っており
絡まれた夜は帰ってから絡み
米検は先ず一俵に念を入れ
今治市　古野伶人

握手した分もチップの中に入れ
踊り子のヒップ半分ずつ隠し
此の上は信心せいと云う見舞
桜井市　北嶋忠明

ボウリングピンの悲鳴が快よい
ふる里はいいな朝寝も久しぶり
ネオンには用なき夫婦通り過ぎ
東大阪市　藤田飛鳥

真つ黒に焼けて海辺の恋終わる
沈黙の二人は星を追いつづけ
愛情へ女素足で駆けている
大阪市　河原林比呂路

眼鏡拭き拭き断る言葉考える
足踏みがながすぎ人生たそがれる
直線に生きよう手内職しても
竹原市　楠貞子

子を想う父と母との差をしかと
心はずむ日の足どりは歌になり
学歴が絶対ひかぬ女にし
東大阪市　落合思月

誘われて出る御化粧に念を入れ
サロンパス匂わせ碁会所へ通い
すてきた過疎が恋しい都の灯
堺市　栗本藤持

地下に住み月の円さも忘れたり
爆弾を餌に使うて気を晴らし
あの時は一億みんな北京向き
大和郡山市　森田カズエ

人間性信じて鹿の交通禍
背番号王と同じ子の野球
雑音の中に私の声をきき
島根県　栂みどり

傷ついた翼あずける母の胸
虫の声かぼそく秋を追いかける

ラッシュの流れに素顔をとり戻し　島根県　東原福子

吉祥天夜のとばりに正座して
秋の蝶滅びゆくもの美しく
風鈴の音を外ずして物想い　島根県　谷岡芳枝

風の糸切れて心にひっかかり
精一杯笑って看とりの汗を拭く
偽りの舌へきびしく咽喉仏　鳥取県　林露杖

海棠の花芯の露に紅透ける
ビジネスが済めばやさしい声で切れ
音立てて燃えて崩れてしまいたし　高梁市　河原孝女

英才の思いあがりに釘を打つ
一人娘に家族中がママになる
あれこれと云っても尺度のない人生　島根県　槻谷一葉

虚勢張る心に秋がしのび寄る
つまずきもプラスとなって延びてゆく
なびくよに見せてコスモス手折られず　松原市　守屋万竿

顔パスをヤング迷わず押し戻し
修学院にて
拝観の列に歴史がのしかかり

叡山を三百年も借りたまま　新潟県　市川一峯

病室へ孤独の針の刻む音
御茶菓子の最後の一ツ手を出さず
しきたりが坐る順序でもめて居る　河内長野市　井上喜酔

意志表示したら圧力のしかかり
立ち話続きはバスへ乗ってから
厄済んでどうやら男の角がとれ　新宮市　川上富子

頂点に居すわり愛に酔うている
淡々としていてそれでも愛たしか
まだ予約中ですと言うフイアンセ　和歌山県　ふきあげ虎城

手枕のままでドラマがすんでいた
何気なく貸すハンカチに仲が知れ
おしぼりのはしで唇ととのえる　西宮市　宮本茂児

残業にさぼった時間も入れておき
デパートで世界の味を買うて来る
部長には部長クラスの愚痴があり　羽曳野市　戸水慶子

議事延々お茶びんだけがよく廻り
新婚はたがいの味へ歩み寄り
花菖蒲絵にし撮して持ち帰り

八尾市　今西寿子

幾たびかとどまってみた長い道
顔のさす世間の非難に今日も耐え
雷も遠くで聞けば丸い音

新潟県　高野不二

猫の子の器量の悪いのが残り
うちに似たとこがあるから見る漫画

大阪市　平井露芳

減食はせずとも男やせて居り
消し炭を取って明治がまだ残り

寝屋川市　福富隆子

燃えるのもおつくう受身の年になり
燃えるもの冷えて喧嘩も下火です

仙台市　川村映輝

人ごとのように〝恍惚の人〟を読む
物価値上げ古米まで仲間入り

大阪市　柳原静香

病む夫へ読む新聞の暗い記事
栗御飯炊いて松茸のまだ買えず

七尾市　松高秀峰

一歩だけ譲って男の値が上り
斗病に勝って変身店を出し

大阪市　藤田頂留子

顔見知りぐちの肴になって飲む
又一人顔と名前のビラ張られ

青森県　岩淵一星

髯剃って爪切って寝る旅行地図
長男を代理でやって孫と寝る

島根県　岩田三和

日本のヘソのあたりへメスを入れ
おやじですあなたの未来この顔ね

新宮市　城丹鶴

散歩への一歩は両手ふりまわし
夢に出る子どもの頃の友の顔

今治市　蔦本昌道

息抜きも休戦もなく夫婦老い
倒産へあっさり切れた飲み仲間

青森県　波だおお

ベレー帽かぶってみても田舎面
一線を引く気か帯を締め直す

兵庫県　高橋近江

丹精を償う穂波へ去り難く
青春を母は笑って話さない

守口市　樋口一峯

昼の虫お前も恋にやぶれたか
三つ編を長々たらしてつぶらな目

和歌山市　島本泰子

小銭切れ通話のつづきかき送り
つなぐ手を振りきり走る子に育ち

弘前市　小山内貞男

猛烈な恋の末路が訴訟沙汰
何事も意の侭になる不幸せ
鳥取県　福田陽山

腹立ちも納めて見えば照れくさく
箕虫に荒され愛情足らぬ事を知り
泉佐野市　大工静子

噂もなく後家を通したバチさばき
喪服着て他人だから笑ってられる
松江市　本庄快哉

ストリッパー女の視線を憎くみる
実印がいらぬ人生たかが知れ
大阪市　新川貞祐

薄うなりましたなァと床屋撫でてくれ
電話では歯が浮きそうでペンにする
今治市　渡辺南奉

この辺が頂点だろう欲張らず
考えた末に嘘書くペンとなり
羽曳野市　麻野幽玄

嘘書けぬから筆取らぬ暮し向き
ブラウン管へ微笑み返す人が居り
愛媛県　小山悠泉

自家用車大工左官の御出勤
ともかくも働く外はない暮し
愛媛県　小笠原仲美

ナツメロを口ずさむ時若くなる

旅五日わが家は元のままなりし
鳥取市　藤本佳女

都市計画我が家も入れた立ち退き図
落し穴ガキ大将が先に落ち
鳥取市　藤本恵子

すれ違う花嫁互いに見くらべる
母もののドラマ明治をまた泣かせ
鳥取市　藤本鎮也

悩むより逢うて話すと娘の勇気
肥えて来た妹をうっかりほめちまい
鳥取市　藤本和宏

寄せ書きの一人ひとりにある字ぐせ
世渡りはドラマのように甘くなし
和歌山市　垂井千寿子

おみやげの手前催足明日にする
相性もよくなっていた銀婚式
高槻市　山田スミ子

ホッチキスへ紙は素直に受けてくれ
働き蜂にも秋がおとずれる
大阪市　稲葉星斗

調停には口説いた方が言い負ける
サーカスの一座が去ってもとの村
福岡市　姫野扇里

文明に罪あり水に魚住まず
自惚れの男世界の裏知らず

大阪市　長谷川　貞

見なれない吸いがらもあり春の宵
春灯の窓にしあわせにじみおり　大阪市　竹内一世

噂しきり七十五日を待ちきれず
水のように素直にならぬ我れを恥じ　大阪市　河野幸子

洒落言ったつもり皮肉に取られてた
顔が良く見える鏡を選んどき　大阪市　鈴木生仏

新世帯朝食抜きの日曜日
大卒の子のある人が養老院　大阪市　花田繁子

中国で聞く君が代とおけさ節
手の方もお疲れでした握手攻め　大阪市　松岡進

束の間のよろこびでもよい孫帰る
わかる日も有ると信じて涙ふく　大阪市　今井隼人

亡き妻に留守を願んで鍵をかけ
親子でも保守と革新と面白い　大阪市　岡部シゲ

アルバムを開けば母が笑ってた
野仏のお顔の泥をふいて通り　高槻市　藤井多加治

社告

新年号から「近作柳樽」を「**水煙抄**」と改めます。

川柳塔社

とうさんのいそがしいのかのびたひげ
かあさんの流れるあせは蜜の味　高槻市　入沢和寿

無重力のところできたいおせっきょう
ざっそうのような子どもに育てられ　高槻市　梶元誕留偉

かあさんのしわにアイロンかけたいな
母の日は早起きをするプレゼント　高槻市　辻雅代

母さんのしわを気にして手つだわず
お姉さん料理のこつはさしすせそ　河内長野市　森本黒天子

我が年を忘れて地車見に走り
野あそびにふところ鏡までも持ち　岡山県　武本柳子

がんじがらめ女　男をしばってる
見解の相違夫婦を無口にし　大阪市　岡本まさひろ

それからの夢が消えない火に狂う　大阪市　松本市郎

竹原市　古江雅鳳

和歌山市　内　芝　としよ

電話でもお声を聞かせて欲しい人

鳥取市　佐々木　静　泉

飲んでいる時に飲み連れの訃報聞く

大阪市　木　村　浊　水

シャレ一つ言っても役の違う人

大阪市　内　藤　ますゑ

孫の守いつの間にやら日課なる

大阪市　村　島　秀　村

お月見のおそなえだんご猫ねらう

大阪市　吉　野　志　津

ゆずられた席にうれしく居る白髪

大阪市　須　浦　つ　ね

族の宿寝付きよき友羨まし

大阪市　松　岡　茶　々　坊

俄か雨心残りのある別れ

高槻市　平　松　幸　平

バカヤローバカヤローで育てられ

堺　市　かわちよしなが

おじいちゃん雲の上からおりてこい

近　詠

須坂市　**高　峰　柳　児**

針のある言葉で忠告きつすぎる

濡れ衣を着せられ世話好きまだこりず

膝少しくずした女に押され気味

冗舌があやまる事へも馴れている

農を継ぐ若さ機械化に切り替える

大洲市　**米　沢　暁　明**

恍惚の人にも似たる枯尾花

ジーパンも女とわかる腰の線

団交は先ず揚げ足をとりはじめ

あととりは家業を継がぬ婿養子

今治市　**月　原　宵　明**

参観日働く母に指輪なし

鉛筆の尻が兇器となった虫

腰振っているGパンが女なり

感情の堰をこめかみ辺で止め

岐阜市　**市　川　鱗　魚**

真すぐに生きよう蟻の業ほめる

赤いもの干すに気がねの多い寡婦

遊んでは食えぬ掟の赤トンボ

三階でみてる二階のつづく痴話

今治市　**長　野　文　庫**

羨ましと思う首相の記憶力

漫画家の予言易よりよく当り

三角の底辺にいていがみ合い

ひき出しに出番が来ない一円貨

川柳五十三次（完）

富士野鞍馬

終点　三条大橋

大津から京都三條大橋まで三里（一一・八キロ）。三条大橋の真ん中が里程元標になっていて、江戸日本橋の中央から一二四里二四町（四九〇キロ）である。

京都の入口粟田口は、三条小鍛冶宗近の古跡で

三条は剱十条は畑をうち　谷田（一〇九2）

と川柳に詠まれ、小鍛冶宗近は、稲荷の神助によって、一条帝勅命の剱、小狐丸を打ったという伝説は、謡曲、長唄、劇にもなっている。

三条の小鍛冶稀代の手間を入れ　有幸（四五16）

名剱に尻声のない手間を入れ　（拾五18）

宗近は空おそろしい手間を入れ　（宝十二信1）

油揚を宗近通帳でとり　風六（一六四14）

と川柳はその稲荷―狐―をよんでいる。

いよいよ京都へはいると

京へ這入ると直き見える大文字　藤丸（一一四10）

お茶お茶と五十三ばい次いでくる　如泉（四九29）

あずまからげをおろす三条　（武十三23）

東山が目につき、如意が嶽の大文字の火床も珍らしく見えるのである。

布団着て寝たる姿や東山　嵐雪

と詠まれ、川柳もまた、

春の日の縫上をする東山・　（武十八1）

青葉時朋黄蒲団の東山　松丸（一三〇9）

夕立でふとんを洗ふ東山　寿山（一五七22）

大の字で碁盤を蟻の這ふも見え　カテウ（四二2）

大の字の形りでとぼすは東山　風松（九六42）

大文字雪も残りはよいながめ　（武十一34）

などと詠んでいる。西には愛宕山がそびえ

詩と小説の

高鷲亜鈍

詩と小説の挾み打になっている
毛髪のように蝿が絡めつく
暑いとき裸の大将寒いとき炬燵の大将
息ついてるだけさ禁酒禁煙コーヒさへ
コップ酒で逝く独陽がうらやましい
鬼ごっこめんない千鳥は不幸な子
平和な柄も庶民のいのちが生地となる
雪の日のチャペルの鐘がなつかしい
還暦を越えても前むきに歩こうよ
凡骨の生かされて生く身を愛す
鳩に影鷹にも影が投射する
叱りとばしても句稿みつからず
大阪の友はうれしい電話口

K・Hに（三句）

お互いに生きてるうちに会うとこう
熱い友情零落の同志と握手
おまえおれ手とり足とり世話させる
玄関も居間も寝間も一つ部屋
人間失格ただ生きている虫けら
騙されたから騙す結果となる負債
小悪党ポリにたてつく新開地
ボスの葬儀に乾分の制服は不気味

愛宕からあそこだなあと本能寺　（一一38）
おそろしい十七文字は愛宕也　（三五29）
―光秀

北には鞍馬山をのぞみ
僧正ケ谷に小さな足駄跡　巨眼（一五四10）
鞍馬から夜な夜な通ふ五条橋　三箱（一三四31）

―牛若丸

市街は碁盤目のように井然として、中央に皇居が在った。
天然さ王城の地は将棋盤　一秀（五三17）
洛中は綾や錦の中を行く　（三二19）
九重は小路小路をあやにしき　市東（三五11）
京の町たひらな所で上り下り　市東（三八23）
坤の卦を並べたやうな京の絵図　いつみ（一二四1）

市中を貫く鴨川の水は清く、その三条通に架けられたのが三条大橋で、高瀬川のが三条小橋である。

三条大橋は、既に天慶三年（九四〇）の記録に見え、天正十八年（一五九〇）に豊臣秀吉が石橋としてから立派な橋になり、今に六十三本の橋脚は全部石である。寛政の奇人、勤王の士、高山彦九郎正之が、この橋上に土下座し、遥かに皇居を拝して、国家の現状を憂えたという史実は有名な話である。その銅像が東詰にある。

西詰北側には制札場があり、三条通両側には旅館が軒を並べていた。

二条橋は、そのころ仮橋だったが、四条、五条には昔から立派な橋がかかっていた。

一トねいりしても四条のわらい声　（一一19）
五条橋足駄をわらじもてあまし　丸斎（九三3）

と、四条河原の夕涼み、五条橋の昔話があり、昔の鴨川磧は、ずっと六条辺まで、よく合戦があった。

三条磧では、文禄三年（一五九四）十月三日に、大盗賊石川五右衛門が、油煎りの極刑になったと伝えられ、

五右衛門は金のかかったころしよう　（七〇25）
五右衛門はなまにへな時一首よみ　（二6）

京都は、桓武天皇以来千年の都で、その周辺にも名所は多く、神社仏閣二千を越え、名所古跡数知れず、

見所に指折なくす京の春　（武十八20）
つつまれるものなら水も京土産　板常（七七12）

今は世界の観光都市になっている。

川柳五十三次もめでたくこれで終り。

☆冨士野鞍馬先生の〝川柳五十三次〟が本号で完結。「川雑」時代から実に三十年間、わが社のためにご執筆いただいたが、ご病気全快の日までお休みになる。ほんとに長い間ありがとうございました。（編集部）

葡萄酒は主の血パンは主の肉洗礼うけし日を憶う
着流しの尻抜けていて銭湯へ手を曳かれ
世紀末を書きたい書きたい書かれない
借りて借りてイバラの上の社長椅子
借金の責苦がなくて今日も無事
沖縄の石が火を吹く十二月
書いたとて社会復起に遠い銭
怒り再び沖縄の同胞に寄せ
北京放送公式主義はわかるけど
点火せよまだ燃えあがるものがある
原罪と知らず平和な顔ばかり
毒ガスも火の海火の柱
一億の小っちゃい小っちゃい蟻の列
昭和元禄イタイイタイ病ミナマタ病
平和とは二度と禍ち冒しません

句集「河野春三集」

解題・松本芳味氏は―前略―現代川柳は河野春三によって始まったものであり、彼の存在を除外して現代川柳を考えることは出来ないからである。とのべている。限定三〇〇部で送料共百五十円とあるだけに売切れは近いとおもう。

発行所は東京都文京区本駒込三丁目14の10　八幡船社

著者は大阪府高槻市竹の内町三八二―二（第七東和苑一〇一号　河野春三）

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

正本水客

シャッターを上げ秋雨を聞きに出る　三井酔夢

表のシャッターを下ろすと近頃の家は外界と全く遮断されて了う。雨降ってるよ、アラ本当!!と表へ出て手をだしてみる。降るとも見えぬ秋雨の音、いつまでも心の余裕は失いたくないものである。

解説者の処生観など耳障り　大坂形水

スポーツ放送を見ていると、解説者と称する人の喋り過ぎが耳障りになることがよくある。生半可な処生観など願い下げだと思うのは私だけではないようだ。

山頭火読んでも見たが身にならず　尼緑之助

ひと頃、山頭火がブームになったことがあった。心打たれる句は沢山あるが、そのギリギリの生き方には、とても従いてゆけない気がする。

台風禍この青空の偽善者め　高杉鬼遊

台風が過ぎた後の眼のさめるような空の青さに対して拳を振り上げることしか出来ないのか、偽善者めは見事な言葉である。

便箋の余白が一日また延し　小林孤呂二

まだ何か書き足りない、自分の意を尽していない、そんな感情を便箋の余白と表現したことはまことにうまい。

デモ隊の歩道越しなるおでんの灯　吉岡通児

デモのなかの数の一つとして歩いている人物が鮮かに出ている。

背を赤くして夕焼雲が走ってる　阿万万的

美しい童話の世界を見ているように雲が生き生きとし生きている。

わが娘を女と見ればいやな型　有信新之助

自分もまた男として見れば、いやな親であるのかも知れない。

気に入らぬ髪で一日落着けず　小出智子

すぐつぶして了うのは勿体ないし、これが女ごころというものか。

学僧と云うを息子と比べて見　島居百酒

大きな禅寺などで、黙々と廊下を拭いたり斎の準備をしたりしている若い僧を見ると、うちの息子はと比べてみたくなるのは馬鹿で幸せな親心というものであろう。

半パンツわが影老いたなとおもう　河村日満

半パンツから出ている毛脛はいかにもほそい。老いたなと思うは実感であろう。

この儘で行こう定年なさそうだ　西いわを

会社を退いて静養に自適しておられる句主の心境、このままで行こうと云える幸せは大切にしたい。

雲に手が届く高さに来て背伸び　板尾岳人

頂上に立って思いきり両手を上げてする背伸び、山男だけが知る喜びである。

戦いすんで日が暮れて一本膳に乗り　鈴木村諷子

上七、中五と大上段にふりかぶって、一本膳にと締めくくったあたり、生活のきびしさと安らぎを詠って面白い。

井戸のふたとればこおろぎ胸へくる　中島英子

もう都会では見られなくなった蓋のある井戸、何でもない情景を句に捕えた作者の心が嬉しい。

▼前号P5下段15行目の浴夜は「浴衣」P16上段2行目のしょっちょうは「しょっちゅう」が正しく、責任校了が直っていなかったことをおわびします。

▼ご投句には本社柳筐か、本誌同大の用紙に立て書きでお願いします。句の上部に○や一などを書くとそのまま活字になります。ご注意ください。（編集部）

近作柳樽

秀句鑑賞

——前月号から——

橘高薫風

マイホームローンの鎖が長すぎる　脇本政己

何もかも月賦の時代とはなった。二十年という長期のローン、気の遠くなるような歳月だが、これが庶民の現実で「鎖が長すぎる」の表現が出色だ。鎖は一月一年の歳月の小環の連なりを思わせ、月賦束縛の意を持ち合わせている。

作り笑いしても病はかくされず　楠貞子

「いや別に何でもないんですよ」と強いて笑っては見せたものの、如何にも力ない笑いである事が自分でも判るのである。

失対を養う草がちゃんと生え　伊藤一郎

交通地獄の街路で、年配の労働者がグループを組んで清掃作業などをしておられるのを見ると、はかどるもよし、はかどらずともよしの態度だから、一層のこと、何とかならんものかと思うのである。草まで失対の作業にふさわしくちょろちょろとしたものだ。

自販機へ小銭いきいき落ちていく　阪上十止庵

自動販売機と硬貨、それを生きもののように描写して成功している。

無造作に野の花活けて過疎讃歌　野呂杜月

発想表現の調和のとれたよさで味を深めた句。

大臣の椅子が待ってるように云い　松高秀峰

政務次官をすでに何期も勤めた。「今度の選挙に当選させて載ければ、大臣は確実です。」おらが大臣を期待する有権者に訴える一つの手で、これも政治家の老獪さだ。

夕刊を二部買う遠距離通勤者　高杉力

電車通勤一時間、駅で夕刊を二部買って乗る。新しい題材に魅力がある。

ご先祖も暑かろ仏壇開け放つ　垂井千寿子

庭の見える涼しい仏間だが、今日のむし暑さは格別だ。仏壇の扉を開けてあげる。夕刻灯明を供すると更に涼しくなる。

共白髪で別居するとは思うていず　山田スミ子

結婚式で二人は共白髪を誓い合った。そして誓い通りに「共に白髪の生えるまで」のめでたさとは相成ったのだが、別居中なのである。別居しないことも又互いに堅く誓うべきであった。

秋夜長虫には虫のマイペース　渡辺南奉

毎夜木犀の木株の下で鳴く虫がいる。真執な声、投げやりと思えるのもいる。虫は皆自然に即してマイペースを守っている。

秋空に一筆啓上ジェット雲　藤田頂留子

澄んだ秋空に一筋のジェット雲、これを一筆啓上と表現したさわやかなユーモア。

俎のくぼみで作る明日の幸　山本窓花

俎のくぼみは平凡な歳月の積み重ねで、そこから明日を信じる主婦の夢が生れる。

眼鏡かけたりはずしたり断わる気　河原林比呂路

金の無心を叔父に切り出したところ、急に眼鏡をかけたりはずしたり。心中手にとるように判るので、断わりを聞くまでもないこととあきらめたのである。単純正直な人物が目に見えるようだ。

『川柳バス』

送料共三百円とのこと

序文は本田恵二朗氏。著者白岩文衛氏は恵二朗氏に師事されているホープである。これほど初心者向きの句集はすくなくないとおもう。（薫風氏談）

B版P一九〇、発行所は岡山市津島二五四一、川柳岡山社。

編集発行人は、岡山県英田郡大原町宮本白岩文衛。

川柳師走の顔

不二田一三夫

本誌創刊号から本年十一月号までの八十六冊から〝師走〟の句をさがしてみた。あるある、実に五百句を越した。これではスペースがないので、雑詠一本にしぼることにした。

課題吟にも佳句が多く、すてるには惜しかったが見送らざるを得なかった。

それでも四百四、五十句ある。そこで〝木枯し〟の句から〝師走〟が動くものを割愛して、なんとかまとめたが、なかには同想の句もあり、ちょっと迷った。しかし一人でも多く活字にしたかったので、このような結果になったのである。

十二月もうける予算と買う予算　一声
年の暮　妻上役へ気を配り　多久志
十二月妻の寝顔のたよりなさ　光道
十二月かけ声をして火鉢立ち　形水
師走風　足を椋めて肩へぬけ　不水
十二月釣り堀にいる不安見る　与呂志
墓口の音も貧そな十二月　初甫
十二月今年もついにやせたまま　旭童
日曜も早出居残り十二月　竹青
大晦日退院する人はいる人　若芽
新年号の付録これでもかこれでもか　文秋
十二月借金のない身の軽さ　祥月
忘年会下戸の隣りに席をとり　濁水
年の暮　市場は声で買わせる気　一休
押しまくった仕事のたたり十二月　藤波
人生の今年こそは今日も暮れ　娯句楽
除夜の鐘やれやれ嘘で年が越せ　同
年の暮方便の嘘も種が切れ　井蛙
お歳暮を拒めば変りものにされ　同
大晦日霰たばしるいいムード　きさ子
十二月睡眠薬に頼る日日　鉄児
十二月まわれ右して見たくなり　旭童

クリスマスに思う

愛それは敵を愛することだった　野迷路
百八の鐘へ保険のペンを措く　静観堂
釣竿を携げて晦日を気ままな子　代仕男
金も一応やりくりついて大晦日　宏方
除夜の鐘を携帯ラジオが移動さす　良夫
除夜の鐘かき消すように救急車　若芽
貧しさに耐えて静かに除夜をきく　芳子
クリスマスツリーは暖地も雪が降り　柳葉
十二月忍者屋敷のテをおもい　一三夫
ゆく年を追うなと響く除夜の鐘　八郎
十二月ガソリン入れるのも忘れ　一声
一年の計崩れたままに十二月　同
十二月頭を下げて越すときめ　同
十二月子供の貯金も借りる破目　勝子
まんまるい月の気付いた十二月　玲人
よく歩く足だと思う十二月　久米雄
中之島劔先は寂　十二月　薫風
一旦は筆をおいたが十二月　同
十二月思わぬとこから取りに来る　静馬
折込みの数が師走を焦立てる　同
ベトナムへサンタの足も重かろう　阿茶
紙屑が追っかけ回わす十二月　不水
やれ買えそれ買えジングルベルがせきたてる　弘朗
ボーナスの出た日の募金断われず　一声
お歳暮をもらう理由をたしかめる　同
年末に閉めれば倒産のうわさたち　同
年末の事故死の記事を寒う読む　同
店頭のサンタ北風に武者ぶるい　一栄
社会禍小さい善意の音も冴え　双楽
十二月ドシャンと一喝怒鳴りたい　形水
数の子の売り場決心つきかねる　同
除夜の鐘雪がチラホラ降らんかな　旅風
金策へわざとオーバー着ずに出る　素身郎
十二月大きな声で子を叱り　柳志
贈られも贈るも暮れにない生活　好祐
来年の顔で賀状を書く師走　滋雀
ゆく年のフィナーレを飾る風邪を引き　同

除夜の鐘せわしく縫って救急車　弓彦
墨すってみたがペンにした年賀　同
十二月魔術のように消える金　筆染
師走です忙しそうに見せて置き　太茂津
今年こそで明けやれやれで暮れてゆき　同
無ければ無いなりで越す十二月　多久志
十二月高い利息を云っとれず　小松園
貸し付を出て師走の風まとも　好郎
こころざしいつか小さく日記終る　同
小企業師走の風にちぢこまり　雪男
師走だというに白雲悠々と　若芽
丙午産まずにすんだ十二月　勝子
去る年のよい思い出を書きしるし　寿美可
十二月街の動きも蟻のよう　清泉
新聞にチラシはらんで来る師走　同
やれるだけやったと思う除夜の鐘　木石
雪景色眺めておれぬ年の暮　秋星
人生の無駄歳暮に気をつかい　茶坊
忘年会つづく夫にやつれみえ　すき
大晦日パパとボクとは追い出され　好祐
孫に買う羽子板そっと抱いてみる　一栄
年の暮れ賑いよそに社会鍋　誓二
墨壺と曲尺へお鏡餅置く大工　白柳
大晦日マネキン服を脱いだまま　独楽
クリスマス墓場は花の贈り物　紅渓
十二月までは南座お茶にごし　欣一
空瓶をかためて売った十二月　久米雄
十二月急げ急げと月が冴え　同
十二月払えぬ顔と相対す　同
締めくくるつもりで十二月を歩き　同
歳末に盗られた記憶だけ残り　梅志

日めくりが薄着になって行く師走　秋月
これ以上待てぬと寄った十二月　甦光
十二月医者も退院させたがり　春巣
借金があるから年の瀬が楽し　生々庵
歳月のうしろ姿へ除夜の鐘　薫風
歳の市老母はオロオロひきずられ　奇童
当然のようにお歳暮受け取られ　同
十二月だけは独身うらやまれ　竹荘
十二月胸算用をして使い　一声
一円の差が行列の年賀状　忠三
子を叱る声も師走は越していた　和三郎
つきはぎの紐で小包十二月　芳月
除夜の鐘とっくに聞いて晦そば　生々庵
本年も敷かれっぱなしで差がなく　水洞
やけくそで糸を垂れてる十二月　同
年の瀬は妻に委かせているざる碁　同
飯時をねらわれている十二月　芳仙
ジングルベル喧し今年は失業中　素身郎
帰省した子も手伝わせ大晦日　緑之助
史上最高などと師走を追い上げる　同
十二月キャッシュで払い拝まれる　静馬
借る話出来て一息十二月　酔夢
物価高歳暮くるくるまわされる　同
うつむいた同士ぶつかる十二月　一三夫
阿呆らしい健保の算術十二月　阿茶
師走風俺も枯れ葉ももろ共に　水車
除夜の鐘嫋々紀元あらたまり　不水
焼芋屋師走の風にいて笑顔　布堂
出稼ぎの帰らぬ家も餅は搗き　同
今年また無芸のままの忘年会　弘生
荷物の手替えて信号待つ師走　明朗

十二月狂騒曲も動じない　同
愛情も小包にして年の暮れ　一保
食うてチョン達者で逝く年迎え年　没食子
手品のけいこっそりするも十二月　竹荘
明日ありと思うて今日の大晦夜　娯句楽
この時化へ船を出すのも十二月　弘道
師走　師走　俺の足跡　祥月
十二月同じことをくり返し　同
憎いほど好み見抜いてきた歳暮　滋雀
腑甲斐無い親と恨むな年の暮　誓二
さらさらと数珠行く年を感謝して　句楽坊
充ちたりし年送る鐘老いの手で　同
歳末へ糸を垂れてる別世界　弓彦
命あるよろこび年越しそばすする　好郎
捨てたい残したい机辺　年暮るる　同
十二月に手の荒れない不仕合わせ　若芽
出し抜けに来て金借せも年の暮　幽玄
厄だった忘年会を派手に飲み　由多香
よしあしも明日につづく除夜の鐘　千歩
十二月忘恩の徒となり果てる　紫
負け犬の後ろ姿へ冬の影　文晴
ボーナスはネクタイ二本買うただけ　一路
マンションに住んで大晦日の夜も稼ぎ　光道
クリスマスイブ子供の夢はケーキだけ　歌子
一年の足あとのんびり振り返り　スミ子
年の暮わが足音にまで追われ　明春
年の暮小さな善意預けて来　秋星
年末のどさくさ不用のものを買い　千太郎
にわとりの足束にして十二月　宵月
失対が師走の街を掘りかえし　同
来年も生きるつもりの日記買う　古方

仏心になれぬじまいに除夜の鐘　同志
松活けて母娘嬉しい春を待ち　柳泉子
どの家もねる気配なし大晦日　法泉子
十二月秒針に似た日を過す　鉄児
十二月口数少ない日がつづく　同
見通しがついて明るい十二月　同
古稀をすぎ口紅選ってる大晦日　阿茶
社会鍋気付かぬふりをするつらさ　実男
夢ひとつ消えて生まれて年を越し　奈良子
除夜の鐘幾つきいたか寝てしまい　藤波
風が冷たや宝くじの列　紅雨
紅白があるので除夜の鐘が聞け　好祐
日本中を寝不足にする大晦日　求女
日曜大工とうとう正月の間に合わず　同
除夜の鐘一つの悔がまだ残り　無聖
落し湯へ今年も無事に終る鐘　美穂
大晦日迷い込んだ年賀状　カヅ子
数の子の値段を子供不思議がり　白扇
年賀状書くだけの筆買ってくる　由多香
十二月毎年同じ愚痴が出る　秋月
一浪の斗志を見たり十二月　春巣
十二月走れば猫も走って来　秋女
十二月別居が実家へ泣きに来る　静馬
十二月相手の悪い事故起し　形水
大晦日おとこ蛍光灯の傘を拭く　同
年末にそなえて風邪も済ましとき　どんたく
ターミナル悲喜交々の十二月　美房
十二月男飲む日の多かりき　独仙
十二月最後の鉢巻きしめ直し　一声
忘年会にいどむ体調ととのえる　同
年末のボーナス街で妻を待ち　水車

年賀葉書買うた帰りに筆を買い　幽玄
十二月やっぱり同じ妻の愚痴　季賛
ルンペンをけなるく思う十二月　静馬
除夜の鐘残る一つを強くつき　藤波
妻だけが苛立っている十二月　遊仙
昼頃になって十二月八日を思い出し　法泉子
張る壁がないほどカレンダーを呉れ　同
ボーナスを貯めろ使えで年の暮　瓢太
数の子を今年もやめて予算組む　高志
霊柩車スピード違反でとぶ師走　与根一
師走師走頬っぺたなぶり風は去り　祥月
カレンダー一枚きりが慌ただしい　鬼遊
大晦日トコトン儲けて寝正月　誓二
餅つかぬ正月貧しさの故でなく　英子
この効きめあれと祈ってする歳暮　不酔
忘年会新年会奈良漬けになってます　春巣
ミミッチイ夢よ師走のクジを買う　弘美
拍子木を打てばアベック道を折れ　同
トイレから何か云うてる十二月　秋星
除夜の鐘余いんは胸の底で鳴り　雪男
十二月何度置いても赤字なり　伶人
クリスマス神も戸惑うはやりよう　象園
十二月蚊が迷い出る陽気　隆子
十二月の来客借金とりに見え　雅子
年を越す真珠一粒嚥みこんで　薫風
一応は折目をつけた大晦日　藤波
動くものみんな動かす十二月　水車
木枯しに並んで当てた飴一つ　どんたく
加減乗除しても答の出ぬ晦日　不水
薬湯の匂いにすがり年送る　多蘭子
暮れ済まし残った金を大事にし　同

もう一杯飲んで師走の風へ向き　可住
用のない犬までついて来る師走　葵水
廻せるもの廻し歳暮の義理はたし　章雅
あわただし師走夜業で晴着縫う　娯句楽
大晦日いよいよ賀状にとりかかり　法泉子
借し金が焦げついたまま除夜の鐘　鉄舟
国道の車の列も十二月　魚山
手術後の枕へ通う除夜の鐘　葭乃
十二月医者も容体半分聞き　勝子
年末を稼いだ腕へサロンパス　汀花
人影もまばらな宿の年の暮れ　象園
旅なれどやはり気になる年の暮れ　同
紅白の顔で一億年を越し　万竿
又してもキリスト不在のクリスマス　歌子
冬眠もしたかろ紙幣のくたびれて　葉子
歳末の吐息おたがい様と逃げ　柳児
忘年会いいなと屋台の客どうし　章雅
追い込みのハッパをかける十二月　形水
年賀はがき買い込み初春へ身構える　静水
退職金底ついてきた年の暮　静馬
ひとのことかもうておれぬ十二月　同
引かされた株だけ残り年終る　形水
年の瀬に行列させる月の石　水洞
十二月間違い電話に腹を立て　一声
わくら葉が街を師走にして走り　旅風
またひとつ年とる暦とどけられ　葵水
十二月某日鉢植ゆえに枯れ　菁居
何億の金どこへいった年末総選挙　明朗
ボーナスもないのでのんびりする師走　同
ボーナスを使いはたした十二月　鬼遊
貸借もないのに忙しい十二月　清子

十二月行く先のない急ぎ足　鵜汀
十二月疲れた貌が振るタクト　美代
十二月親には早く子はおそく　無閑
軍帽を直直ぐかぶる社会鍋　酔々
ある願い目なしダルマを買う師走　紫
十二月フルーカウントとなりにけり　栞
中小企業持ち駒のない十二月　同
生きる歓び遺書改める年の暮　多久志
人波にむなしさをふと暮の街　同
古稀近し悔も無く聞く除夜の鐘　同
パトカーの音もきびしい十二月　頂留子
なるようになるサと悟った十二月　秋女
社会鍋ネオンの色に染まらない　虎城
年の暮ジングルベルで歩かされ　万竿
十二月妻を貞女として眺め　酔歩
総選挙よりも紅白気にかかり　秋星
十二月サイレンの音よく響く　同
年賀状手本にするのをより探し　静子
クリスチャンたった一日だけですみ　濁水
なんべんも夫に忘年会があり　柳子
クリスマス祈れるものは祈りおり　薫風
百八つ一年の垢流しつつ　どんたくみのる
判コ押すこと賀状でも心地よし　一栄
除夜の鐘六十七になり申し　吐来
年末の床屋一ちょう又あがり　一二三
師走悠々ルンペン一人欲がない　同
社会鍋の声くじを買う輪に吸われ　一水
怒らずにすむこと怒る十二月　春巳
塵を焼く煙に晦日の茜雲　綾女
大晦日孫にせがまれ遊園地　柳児
どの顔も深刻吊皮の十二月　バット

一枚の賀状位いで済まぬ義理　国彦
主の無い蜘蛛の巣払う大晦日　繁子
早やばやと師走に水着のコンテスト　濁水
忘年会下戸幹事役買って出る　小松園
気疲れの仮面のままの歳暮れる　葉子
変装が私に似合う十二月　阿茶
フィナーレは静かな静かな鐘一つ　紅渓
クリスマスお棺へ添えて星条旗　宏方
十二月凡人ここに来てあわて　暁風
あれこれと思い出古稀の年暮れる　某人
つき馴れた嘘が通じぬ十二月　同
ちび下駄へ暮れの算段まだつかず　同
暮れの街どう曲っても十二月　蘭幸
口笛にメロディがなし十二月　笛生
け飛ばされそうに師走おしせまり　真奇
小走りに帰ってくるのも十二月　敬一
忘年会だけは主役の倉庫番　没食子
駄句刷って自己満足の年賀状　宏方
宝くじもう売切れる十二月　岳人
十二月乗り切れそうな妻が居り　千歩
使わな損々母娘して十二月　久米雄
十二月忘年会を一つ蹴り　同
十二月見られたくない辻を折れ　求芽
年の瀬も信号のリズムは同じこと　同
落葉もうあとは掃かない年の暮れ　水洞
顔見世の義理人情に酔える齢　同
借りて来て貸して長屋の十二月　潮花
歳末のビラ気忙しい足で踏み　一保
掛け声も会話も活気づく師走　一声
十二月スリも巡査も忙しい　同
忘年会あけて飲む日を相談し　祥月
裏目から裏目を追って年が暮れ

一分間の柳論

奥谷弘朗

話し上手は聞き上手、という言葉がある。

うまくしゃべることの出来る人は、ひとさまの話を聞くのが上手だという意味である。相手を自分の中に引き込み、聞き手の心を摑んで、その話を聞きたい心にして膝を乗り出してくるようにしむけてしまうからである。

私達の川柳にあてはめて考えてみたらどうでしょう。よい句は読者の心を摑むものでなくてはならない。どのような句材を、どのように取りあげ、どう扱うかが問題である。

川柳は目前にいる話し相手と違い、作句者とかけはなれた別の所で、文字で読む、しかもたった十七音字で自分以外の大勢の人々を感動させ、感銘させるものでなくてはならず、できればその句を覚えこんで他の人へも伝えてもらえる句を生まねばならない。

それを目標にして作句することが私達川柳人の正しい、望ましい作句姿勢であり、作句の心構えだと私は想う。

サンドイッチマン今日はジングルベルの歌　季　賛
工事場に予裕が欲しい十二月　魚　山
値上りへスピード感の増す師走　静観堂
嵌めわすれた入歯とりよせ忘年会　克　枝
カレンダー放り込まれて年の暮　笛　生
一年の無事が尊い除夜の鐘　蘭　幸
ボーナスが出たぞ師走の人となる　忠　三
お歳暮は辞退しますと予告が来　同
除夜の鐘撞いてお寺の居候　代仕男
倒産の噂チラホラ十二月　頂留子
なわのれん愚痴も肴になる師走　止　水
年の瀬が素足にさせた大掃除　柳　志
北風へソクリ吐き出す暮の市　孝　華
除夜の鐘ラストは春の音で鳴り　阿　茶
除夜の鐘去年の白粉落しつつ　与呂志
底辺の汗十二月の匂いする　同
除夜の鐘聞きつつ夫婦の酒にする　どんたく
良きパパがケーキと帰えるクリスマス　一二三
今年また添えず除夜聞く寮ぐらし　千万子
床の間に日の出を掛けて除夜のかね　百　酒
年の瀬に富士は日の出を待つ姿　利　美
餅代というボーナスの社に勤め　カズエ
年の暮義士外伝が泣かせてる　静　香
夫のベレーを目印にして暮の街　止　水
死に急ぐこともあるまい十二月　めぐみ
落ちついて歩いてみても年の暮　同
エプロンのままお茶の味十二月　美佐雄
冷戦の隙間へ師走のしかかり　孝　華
話したいことみな春へ回わしとき　同
小雪舞う除夜の参道春の音　峻
シシ追いは賀状も欠礼してしまい　国　彦
忘年会の通知女房に間引かれる　濁　水
大晦日隣は隣うちはうち　黒天子
ゆく年に真っさらの下駄おろしとき　草　右
お歳暮を貰いデパートで値を調べ　久米雄
駈足で来る十二月に追い越され　同
散髪をして一年を終りとす　同
忘年会の酔いが残ったまま出かけ　生々庵
今年も無事に枕木の役果たし　三林坊
十二月人それぞれに生きている　鬼　遊
十二月働く歩巾にすきがなし　晃　男
十二月今年もふところ軽かった　没食子
正月が来るので歯医者へも通い　不　酔
又一つ取ったと書いとく年賀状　梁　水
来る年へまた駄馬なりの鞭をあて　多久志
除夜の鐘古稀を迎える齢で聞き　久米雄
十二月小さな義理は聞き流し　静　馬
折込みが主婦を惑わす十二月　明　朗
新春のプラン財布はあと回わし　つき子
不況下もジングルベルは遠慮せず　君　子
十二月多用な貌で旅にいる　同
年の瀬に観劇券をもて余まし　千　梢
師走まで枯葉のように流つき　葵　水
ポルノ篇見てクリスマスイブの街　素身郎
難問を持ち越し忘年会静か　同
白髪ふえただけで今年も暮れんとす　どんたく
底辺に住み赤旗も振れぬ暮　春　巳
幸せはぼくにも出来る社会鍋　緑之助
弱点の指適も受けて十二月　水　車
十二月けつまずいてもふり向かず　春　日
忘年会無芸大食芸のうち　一　水
白い杖だけはあせらぬ十二月　滋　雀
次女白血病にて逝く
悲しみに克とう師走の風が吹く　祥　月
二人二月最良の年無事終る　弘　朗
二人きり鍋焼うどんを食う師走　秋　月
年末も年始も妻の忙しい　弥　生
マネキンへ一足早い新春の服　同　栄
除夜を聞く老いの心が冷えてくる　綾　女
ふところ手師走に何をする人ぞ　同
喪中忘れ年賀ハガキの列に居る　千　洞
十二月人同士でたすけ合い　水　子
根負けて受けた歳暮とのおき所　千万子
忠臣蔵がチラホラ師走の街らしく　多久志
腹立てることもうとましく年の暮れ　同
南国も初雪を見る十二月　暁　明
忘れたきこと多かりき年暮るる　幽　玄
十二月代理でなすべもない師走　同
ぬかるみを抜けすすみ義理が増え　笑　子
商子と妻にづらにに引きづられ十二月　南　奉
主婦のネオンにせめきらめく十二月　福　子
美しい業ボーナスしい暮　千寿子
大売出し稼ぎ嘘の年の暮れ　春　海
損師走でもいかずるいそと　秀　村
歳末ばいばいえしらばいそと　繁　子
梅立ちぶりの足で舞い　潮　花
静を持ちしたみ日記を閉じて新春　奇　童
越十六歳の音を聞く　素身郎
除夜の鐘　あ
除夜の鐘遠くに正月やって来る　肖　い
喪中だのに救急車　忠　二
百七ツ　三
今年会　句　楽
忘年会　要　次
温い風ボーナスを伴う町を抜け　可　持
除夜の鐘世界平和を聞く　松　花
除夜の鐘防空壕の日を思う　藤　水
ヌードカレンダー貰い簞笥にしまっとき　濁　花
鉄窓　児

通信

（宇和川木耳さんの死）

東野大八

―不二田一三夫宛

宇和川木耳さんが十月十一日死去されたと大井正夫さんより電話あり。愕然として言葉なし。おびただしいこの人の書簡の中に、つぎの数行がありました。『路郎忌での葭乃選は始めからハッテいました。処が**背景に地平線を持つ髭と髭**の方が抜けると思ったがあてはずれ、もっとも「持つ」は「引く」とすべきだったと後悔している』番傘古参の五十年にわたる同人で、大陸番傘の発展につくされたが、辞退フリー。いまにしても番傘切っての好作家でした。お念仏申しています。

比叡山参拝団に参加して

鈴木村諷子

出れるうち出ておく同士うまが合い
剽軽なバスのSの字のの字書き
森の底眼に鮮やかに寺の紅
ゆがみたる心ものすか杉木立
地下風呂の窓からビワ湖俯瞰する
比叡山小鳥の声につれて明け
しわぶきもなくてしじまに法話きく
展望台霧がさえぎる風情にて
猿の目に善男善女という安堵
ビワ湖大橋ハミガキ揚子ほどに見え
大原女美女は餅などもう売らず
ころも着た人もちらほら京の街
二条城拝観寓を鳴かせつつ
築城のかげの哀史は語らない
城門を出れば文化の人の渦

高野行

香川酔々

苔のはな梵の一字をかざる花
鍬形の兜に代わる梵一字
青蔦の墓石に史話の裏表
宿院に飼われて鯉のおさとなり
高野谿蝶の見せるは逆落し
高野谿蝶存在の黄を示し
高野谿蝶の舞うのはわらべ唄
馬が嘶く高野聖の影追うて
浄土にも地獄変あり蟻地獄
つくつくし七百年の樹齢告げ
夕焼けて高野浄土のぬれ仏
剣に蛇巻いた不動に塵つもり
苅萱堂おやこの絆絵巻とす
千年の香煙浴びて杉育つ
山深し千年杉に季節の風
鮑の影走る清水を閼伽とする
学僧に故里遠く夕映えす
ケーブルに乗りて戻るは修羅の界

一分間の柳論

浜野奇童

川柳雑誌で手ほどきを受け、その川柳に惚れて入会した私は、今でも路郎先生の「川柳とは……平言俗語で人の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩」を唯一のよりどころとしている。

よりよきものを指向して、それぞれの主張をもち論議を交わすことは、柳界発展のために誠に結構なことであろう。けれども、それが、ただ単に自己の名誉や物欲のみにつながっているのでは、破壊にこそつながれ、繁栄にはつながらない。気になる昨今である。

川柳を歌俳に劣ると思うのは、川柳人の卑下であって「川柳の境地は、歌俳では到底表現できるものではない」と、高く評価してくれている人は非常に多い。

いたずらに土俵を拡大したり、土俵を他に求めるのは川柳からの逃避であろう。自信をもって、川柳でなければというものを求めて研鑽を積んでいきたいものである。

餅花

竹中肖二選

餅花を松屋町からかついで来　潮花
餅花を並べて過疎の床飾る　英子
餅花が神社を祭の色に染め　松花
餅花を珍らしく見る団地の子　どんたく
餅花がなけりゃ正月来ぬ明治　旭童
餅花に夢をかけてる子供部屋　里風
餅花の色とりどりに初日の出　七面山
餅花が特等生んで書き足され　貞祐
餅花に明治の匂う兄の家　章雅
古き良き時代の餅花ふと偲び　貞男
餅花へ想い出のある老夫婦　思月
餅花の由来を孫に言い聞かせ　英詩
花のない季節に餅花咲かす　知恵度
餅花に花簪を取られたり　輝親
過疎の村せめて餅花賑やかに　一郎
餅花も代用品で割りきられ　昌道
千客万来もう餅花が邪魔になり　梁水
餅花も客待ち顔の雨の街　好一
餅花もある色街を懐かしみ　悠泉
餅花の明暗みせる灯がともり　暁明
餅花をテレビの上に飾りつけ　伶人
餅花になる幸せな一と握り　白汀
餅花が来る正月を呼んでいる　重人
餅花の下で帰省の夜を更かし　本蔭棒
民宿の味餅花でもてなされ　扇水
デコレーション売場に餅花売っていた　古方
餅花を飾って孫の帰省待ち　不酔
餅花の下で疲れた帯を解き　宵明
餅花を池の鯉にもお裾分け　春日
雑踏の上で餅花ゆれている　葵水
餅花を手伝うているスキー客　バット
餅花を供えて祈る繭どころ　国彦
餅花に春の足音近うなり　千翁
餅花を除けこいさんの高島田　杜月
餅花を飾る家風に嫁も馴れ　弘朗

佳人　地天

腕っ節

林葵丘選

廃坑の逸話の中の腕っ節　宵月
腕っ節だけには自信ある次男　三和
電動工具に追われる年期の腕っ節　貞祐
横にいるだけで腕っ節の価値可　住
デリケートな事に不向な腕っ節　軒太楼
腕っ節の強い男の方へ惚れ　七面山
腕っ節細うみえても筋があり　不酔
勝てば官軍腕っ節をまだ誇り　古方
護身術娘ある夜の腕っ節　カズエ
開かぬ戸へ借りた男の腕っ節　暁風
最後には勝つヒーローの腕っ節　本蔭棒
歩が悪い男がふるう腕っ節　貞男
人情にもろい男の腕っ節　思月
抱かれたら息も切れそな腕っ節　杜月
定退後夜警で残る腕っ節　英詩
国会をけがす野党の腕っ節　度
特売場女がみせる腕っ節　利美
腕っ節自慢施設の餅をつき　松花
腕っ節自慢太鼓の乱れ打ち　国彦
見くびった養子意外な腕っ節　バット
人生を腕っ節で行くときの風　藤持
けんかには負けなかったと懐古する　智司
刺青のあわれしなびた腕っ節　肖二
庖丁一本老舗ささえる腕っ節　悠泉
子の目にはたのもし父の腕っ節　重人
腹芸で来るから腕っ節が泣き　梁水

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二一—四
夜間 (762) 四四〇八

潮風で焼いた漁師の腕っ節　敬一
ヘナヘナと女に折れる腕っ節　奇童
腕っ節脳の弱さをカバーする　好一
腕っ節レジャーを稼ぐ尻も押し　白汀
生きて行く今日をささえる腕っ節　弘朗
腕っ節で行けと若さを力づけ　昌道

佳

腕っ節かなわぬさかい言うて逃げ　どんたく
腕っ節の点でも女房の方が上　七面山
腕っ節強いばかりに気をもませ　豊生
腕っ節だけで小物として仕えろ　亭
腕っ節重宝がられ嫌がられ　梁水

人

腕っ節だけの男で倦きられる　葵水

地

腕っ節渡り歩いた過去を秘め　代仕男

天

子に頼る気はなれない腕っ節　旭童

軸

古稀すぎた祖父の押す櫓の早いこと

浴客

野村岬月選

北からの浴客にきく米の出来　敬一
浴客の阿呆上げ底高う買い　不酔
浮気して見たい湯の街雨つづき　思月
混浴へたじろぐ客となれた客　章雅
入墨がはいり湯舟がおとなしい　里風
浴客の名乗りが要らぬ身を沈め　可佳
浴客のも一度とはいる山の冷え　旭童
はしゃいでた浴客殿が無理心中　七面山
まだ宵と浴客むほんの謀議　貞佑
何食わぬ顔で浴客朝の飯　杜月
浴客を長湯にさせたのど自慢　弘朗
効くまでは財布がもたぬ湯治客　利美
浴客を見分けて誘いかけて来る　輝親
浴客に手配写真に似たのも居　松花
その当座浴客非常口を聞き　一郎
浴客の賀状が届く山の宿　バット
大臣を呼び捨てにして湯治客　梁水
浴客が空気の旨い里を賞め　代仕男
浴客の余白を埋めてくれる釣り　葵水
浴客も満員御礼続く日日　秀峰
あちこちの訛りあつめて湯場たい　暁明
旅の恥残して温泉バスが出る　奇童
浴客へ金、銀婚のない孤独　昌道
混浴の視線案外ためらわず　同
浴客に宿の景気を案じられ　悠泉
女湯がシキリを越えて姦しい　肖二
板さんも浴客となる公休日　国彦
浴客の話ごまかす顔が見え　木魚
パンフレットほどでない露天風呂　翁童
湯の宿の弦歌が遠い老夫婦　どんたく
評判のいで湯の山菜たべ残し　英子
浴客の服を着ているのが幹事　素身郎
平凡な浴客となっている作家　古方
浴客が歩行者天国を作り　菩句
大阪の銭湯ゼニの話しする　智司

佳

浴客にくらしのうしろ姿あり　千翁
浴客の不評をかった取り締り　素身郎
月の夜の大浴場に独りだけ　どんたく
温泉へ来てもつつましく湯を使い　不二
土産屋に値踏みされている浴衣　奇童

人

湯の街の裏を訊いてる仕舞風呂　梁水

地

温泉のマナーに弱い母を連れ　扇水

天

番台は女の素顔知って居る　思月

軸

ひさかたのはなし山の湯霧となり

色紙短冊
書画用品
大阪彼岸寺
丹青堂
電話 七二二・七三二

初歩教室

——題「無」——

本田恵二朗

作句すること、それは思索することだ。思索するという能力を与えられている動物は人間以外には無いであろう。それは人間の特権である。われわれ川柳人は、川柳を生むために、静かに思索する時を持っている。なんと倖せなことであろうか。思索することによって、人間形成がなされるのである。円満な温厚な人間像が作り上げられるのである。

小器用に句を作り出すだけの作家では真の作家とは申せない。作句することの連続によって、上記のような人間に成らねばうそである。川柳初歩の作家は、この心構えをまず身につけてスタートせねばならない。これが初心というものであり、この初心は生涯忘れてならぬことでもある。時代の変遷がどうあろうとも、川柳の心には微動だにせぬ筋金が一本通っている。その筋金を発見して欲しいと、私は初歩の川柳人によく申している。そしてまた、教えられるよりも、みずから発見することの方が数十倍の値打ちがあることも知って欲しい。川柳界に名声をはせる作家にならなくてよい。生涯川柳街道を歩き続ける作家になって欲しいと主張する私である。

無愛想だけど真実味のある男　三十四
（無愛想がこんなにくれた真実味）

無一文に落ち一円の有難さ知る　つとむ
（無一文になって一円の値打ち知り）

無駄な死でないと慰められて泣き　万竿
（無駄な死でないよと他人さまは言う）

無心状切手一枚添えてあり　同
（切手一枚添えて無心の長々と）

無病息災長生きをじやまにされ　翁童
（無病息災八十五才をじゃまがられ）

無理無体しかけて良心見失い　同
（無理無体良心どこかえ置き忘れ）

無理強いをされてうれしい酔機嫌　静泉
（無理強いをされてうれしい酒の虫）

無駄だとは知っても一度念を押し　同
（無駄だとは百も承知で念を押し）

名も財も無くて気楽な今日が暮れ　秋女
有るようで無い無いようでもありますわ　頼次
（あるような無いような顔で貯めている）

無い袖を言わない友で酌いでくれ　寛
（無い袖を振り振り酌いでくれる友）

彼岸花焔となりて無縁墓　露杖
（無縁塚守るほのほの彼岸花）

持つものは友よ無利子の金を借し　度
（持つべきは友よ無利子で貸してくれ）

無駄もよし人生長い旅なれば　本蔭棒
（無駄もよし長い人生あせるまい）

人生に光り無くとも捨てられず　涙月
（光りの無い人生だが捨て切れず）

暴力は力はあれど知恵は無い　生仏
（無法者腕力ばかりで知恵が無い）

地位名誉おまけに金も無い気楽　茶々坊
（気楽さは地位も名誉も金も無い）

無理をして作った笑顔は泣き笑い　シゲ
（無理矢理に作った笑顔が泣いている）

二日休わけのある無しただ嬉し　志津
（文句無く嬉しい連休孫ら来る）

無理強いはしないとじんわり寄附が来る　露芳
（無理強いはせぬがと寄附帳つきつける）

確信が有無を言わさぬ顔にする　重人
無駄骨と違う未来の布石です　同

ATLAS
アトラス
高級洋菓子・レストラン
本店　洋菓子部TEL (33) 9974
レストランTEL (21) 2334

（無駄骨ではない未来への布石だ）　豊生
無人駅花壇の花は今日も咲き
（無人駅の花壇で無心に咲き揃い）
切符きる駅員だれも表情無し　藤持
（改札の機械のように無表情）
落ちぶれて無い袖振れぬ今日の仕儀　進
（袖が無くなって落ち目を意識する）
道端の無縁仏に花をさし　隼人
（菊一輪無縁の墓へおすそ分け）
手もみして無理を言い言い三拝し　濁水
（三拝九拝もみ手しいしい言う無心）
無邪気な孫と遊ぶ午后のひととき　まるゑ
（生甲斐は孫の無邪気と手をつなぎ）
無いようでみんな持ってる悪い癖　繁子
（無いようでそれぞれ持ってる悪い癖）
金は無し借金もなし裸一貫　秀村
（裸一貫だが借金の無いくらし）
妥結には遠く労資の無言劇　利美

都会っ子故郷の無いのをさみしがり　つね
百カ日無口ますます無口なり　貞祐
名月も星の宿りも無いころ　同
七五三の孫へ無い袖振ってやり　誓二
諸行無常花を咲かせて葉を落とす　同
（諸行無常きれいに咲かせもう散らせ）
無駄話から本心を見抜かれる　比呂路
追突事故惜しいお方を無に返し　陽山
無意識に過した世にも味はあり　まさひろ
（無意識に泳いだ人生振り返えり）
無理ばかり言うてた人を偲ぶ日日　千夏
無に返る身なれば何か残さねば　同
手元には無いとは言えぬ義理があり　茂美
無い方が気楽ですよと負け惜しみ　好一
手拍子は派手にはやしている無芸　同
無一物で故郷出た日の茜雲　カズエ
無医村と聞いてなんだか胃が疼く　同
お喋りの母より無口の父が好き　慶彦

文無しの遺産達者な子がふたり　同
文無しにされてパチンコ追い出され　同
無と思えば玉も芥もおなじこと　つた子
あれも無しこれも無しとは面白し　同
無も有も人それぞれの思いよう　同
僕の胸無憂華と有憂華の花盛り　静観堂

題―（柱）―十二月二十日締切（二月号発売）
宛先　岡山県倉敷市下津井三五二〒七一一
本田恵二朗

★

服部明陽軒著

川柳宗右衛門町　百句

福井野迷路先生を通じて、再三一献くみ交わし、寄席や川柳を語りたいと誘ってくださっている明陽軒さんが句集を出した。「宗右衛門町」とタイトルのついた瀟洒な自選句集である。

太左衛門橋北畔に「明陽軒」という名物金鍋の店がある。ぼくは一滴も飲めないので、今だにせっかくのご招待にもそっぽを向いているような格好になっている。（F）

大和屋の太鼓きこえて春近し
洒落がすぐ出るトンボリに住み馴れて
宗右衛門町舞の手振りをしてゆく妓
おき宗に岡部伊都子が草履選る
恋あまた太左衛門橋知っている
包丁の芸　花となり鳥となり
道頓堀河畔と書いて人を待つ
法善寺小唄師匠に声かける

一分間の柳論

川竹松風

柳誌発行をしていると各地からいただく交換誌の数も多くなりいつも丹念に眼を通しているが、気にかかることが一つある。

それは、雑詠選には見当らないようであるが、課題吟選者にしばしば見受られることである。それは不活発な選後評、感に添えて「盲選多謝」と結んでいることである。それは、もしやという不安がともなう弁解とも受けとれる盲選多謝、選者に対する意地悪い比喩であるが、内容をろくに検討もせずにくわえタバコでソファーに深々と身を沈めて判を押すことを重役の盲判という。

熱心な投句者の例から見ると頼りにならぬ選者にうつる。謙遜は日本人の美徳であり不確信でもある。課題吟といっても認められて選に当る以上は全力投球で自信をもって選をした以上「盲選多謝」という不愉快な活字を柳界から一掃したいものであると思う。

第二百五十七回（四十七年度第十一回）

大萬川柳

「蓋」

入選発表

選者　川村好郎

投句総数　四百七十六句

入選　五十六句

大阪　阿茶

口に蓋出来ず団地のスキャンダル　大阪　小松園

臭いものに蓋する役目の金包み　堺　ひろ子

蓋ポンと締めコンパクトへしまう嘘　堺　一二三

口に蓋したい女房の愚痴つづく　羽曳野　可動

今日耐えて涙ぶくろの蓋を閉ず　大洲　暁明

蓋をとる手つきも女の姿態見せ　堺　青香

蓋開けるまでは強気の胸算用　東大阪　弥生

なりゆきにまかせる主義で蓋をする　富田林　維久子

蓋あけて考古学者の謎が増え　奥　文明

排気口蓋をさせたいカーラッシュ　大阪　智子

噂の中で女は心の蓋を閉じ

大阪　智司

よく煮えていますと告げる鍋の蓋　大阪　比呂路

掌の蓋で助言求める電話口　島根　芳子

口に蓋された通りに子は喋り　富田林　花梢

耳に蓋して感情を整える　香川　酔夢

蓋閉じて貝はきれいな海を恋い　大阪　修史

蓋しても見抜く瞳を妻は持ち　神戸　牧人

蓋あけの人気ダフ屋も来てならび　倉敷　千翁

お待ち遠さまでと蓋が言いました　大阪　一栄

蓋取れば自惚れ候補の票の数　鳥取　静泉

押し蓋の加減家伝を漬けあげる　橋本　木魚

臭いもの蓋した市会おさまらず

大阪　滋雀

みも蓋もなく鼻先であしらわれ　大阪　之保

触れられてうずく心に欲しい蓋　大阪　柳信

日雇いのお茶は弁当の蓋ですみ　大阪　利美

あら煮きの秘訣は母の落し蓋　鳥取　豊生

蓋されて古墳静かな夜に戻り　大阪　水客

身の程を知ってる貝の蓋をする　倉敷　里風

コンパクトの蓋背信へ思案する　弘前　貞男

蓋をして欠点かばう妻がいる　郡山　カヅエ

重箱の蒔絵の蓋にみる旧家　豊中　古方

蓋少しいびつのままでよし名器　松原　史好

蓋しめた筐を胸に女嫁き

みも蓋もない返事となすお茶を注ぎ　倉敷　白水

弱点の酒に秘密の蓋がずれ

倖せは家族の胸に蓋がない　堺　天笑

つまみ喰いもとの角度で閉める蓋

煙突に蓋かぶせたい公害地

蓋あけるまでが勝負の総選挙　藤井寺　吸江

コンパクト蓋する音にある自信

蓋をせず話せる友のある誇り

蓋開けて世論調査の恐さ知る　倉敷　梁水

平凡な暮しの湯気へ蓋が鳴り

割れ鍋の僕にも過ぎた蓋が出来

蓋あけて初めて知った自己過信　倉敷　素身郎

耳に蓋して定年待つばかり

蓋のない茶碗遠慮はいらぬ仲

涙もう枯れはて棺の蓋をする　佳句　堺　天笑

失言を蓋してまわる赤電話　香川　酔夢

営業所
阿倍野店
堺店
住吉店
平野店
都島店
今福店
十三店
九条店
八尾店
買いよい
良い安い
月賦百貨店
crcdit system
丸越
本社　大阪市阿倍野筋3—15—1
TEL 632—3806　3807

蓋欠けた夫婦茶碗にある絆　松原史好
救急箱ほっと安堵の蓋を閉め　大阪利美
終電車あくびに蓋をせぬ女　大阪新之助
確認の嗚咽をこめた蓋をする　人ノ句　倉敷春日
蓋をした隙間を洩れる黒い霧　地ノ句　大阪一栄
かばかりの事と蓋してくれる姑　天ノ句　神戸牧人
折詰の蓋押し上げて祝い鯛　選者吟
蓋とれば器ほどではない料理

昭和四十七年度ベストテン
（十月現在）

一	吸江	二〇、〇	藤井寺
二	里風	一九、〇	倉敷
三	天笑	一八、〇	堺
四	酔夢	一七、〇	香川
五	弥生	一六、〇	東大阪
六	牧人	一五、五	神戸
七	水客	一五、〇	大阪
八	花梢	一五、〇	富田林
九	梁水	一五、〇	倉敷
一〇	克枝	一四、五	倉敷
一一	修史	一四、五	大阪
一二	芳子	一三、五	島根
一三	史好	一三、〇	松原
一四	弥栄子	一三、〇	富田林
一五	可住	一三、〇	兵庫
一六	智子	一二、五	大阪
一七	千翁	一二、〇	倉敷
一八	太茂津	一二、〇	和歌山
一九	一二三	一一、五	堺
二〇	英詩	一一、五	吳
二一	一栄	一一、〇	大阪
二二	之保	一一、〇	大阪
二三	美代	一一、〇	富田林
二四	白水	一一、〇	倉敷
二五	新之助	一〇、五	大阪

以下略

昭和四十八年度第一回
「一回」五句以内
締切　十二月二十日

第二回
「決断」五句以内
締切　一月二十日

投句先
堺市堀上緑町一ノ三ノ七
（〒593）藤井一二三方
大萬川柳係

大萬川柳会の会則

一、本会は川柳に趣味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ、その技その覇を競い、柳界の向上発展と相互の親睦を図るをもって目的とす。

二、毎月の出題並びに選は川村好郎が担当し、投句は一人五句以内、用紙は官製ハガキ。選句は到着順に一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を付記し、順次混ぜ変えて選者に渡し、選句をする。

三、毎月二十日締切、出題及び入選発表は毎号の川柳塔誌上に掲載される。

四、左記の採点法により月々の得点を加算し順位を定め、毎月のベストテンを発表する。同点の場合はその月の投句先着順とする。天位、四点。地位、三点。人位、二点。佳句、一、五点。平抜き、一点。

五、毎年十二月締切分から翌十一月締切分までを一年度として、年度間の綜合点の成績に依り順位を定め、年度ベストテン把持者に賞品を贈呈し、大会の選者に推薦、懇親宴に招待す。なおベストテン第一位には特に梅里賞をもって表彰する。

六、本会の大会は毎年一月又は二月に開催する。本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費は別に定む。

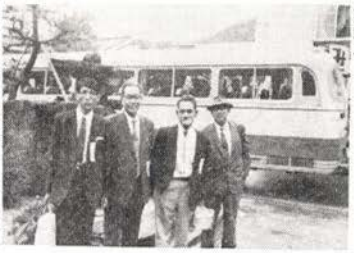
七、投句その他の連絡先は大萬川柳係へ。

予告

第二十回記念大萬川柳大会
昭和四十八年一月二十八日（日）
正午―詳細次号発表
会場は大萬（故松江梅里宅）

柳舌

課題吟に強い人は多趣味のようである。どんな題でもコナせるというわけ。好郎氏の名選者たるゆえんは、やはり視野が広いという強みがあるからだとおもう。句会で披講を聞いていても、多趣味の人の選には巾があるので楽しい。つまり選者も句者もよく遊べということになるか。中央公論も読めばスキャンダル満載の週刊誌もひもといてはいかがということである。人気歌手の名ぐらいはおぼえておくようにしておこう。（F）



大陸川柳大会の会場前ー左から薫風、日漓、葵水、栞諸氏ー写真・弘朗氏

▼中島生々庵主幹は白石正義回顧展の作品の中に「柳人麻生路郎先生像」のあることを知り、堺市のマツモト画廊へ見学、路郎先生の像に親しく会ってとられた。十一月中旬奈良薬師寺へご夫妻で写経に行かれた

▼冨士野鞍馬氏（東京都）から―このたび富山県氷見からこのたび富山県氷見からわたしの句碑が建てられるので、その碑面の揮毫など仕事のようなことをするとエックスメニエールが出ます。内臓に故障はないので健康体です、と。

▼直原玉青画伯は十一月一日、ボストンで開かれる展覧会へ南画を出品されるので空路日本を立たれた。

▼紋土二八八号で長野文庫氏が、作家としての主張と、選者としての姿勢は別もので、好き嫌いで作品の評価はできない、と。

▼第八回さいたま川柳大会（七月三十日）は選者を大正、昭和生まれの若手を揃えて新鮮さを打出し盛会。川柳塔同人野村太茂津氏が投句者順位で第二位を獲得

▼静岡市文化連盟の結成式が九月二十六日市婦人会館で開かれた。文学部門では川柳が最初とのこと。

▼川柳えんぴつ十月号は西田自然人作句四十年記念特集号。また同人水野たかを句集「髭とポスト」B6百二十頁が十月上旬発刊された。

▼川柳東京の冨士野鞍馬氏が、メニエール氏病療養のため会長を辞任。蔵多李溪氏が会長に就任。明後年三月に創刊三十五周年を迎える東番の今後の活躍が期待される。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

有信 新之助

▼国鉄川柳第十六回全国大会は百名を越す盛会。

▼川柳はこだて二五三号で、戸田古方氏の手書き句集に、泉きよし氏が「わたしたちの人生というものを総体としてデザインした。作者の実人生のあかしであり刻印である」と。

▼札幌川柳社が創立十五周年記念第三回川柳作家誌上合同句集作品を募集。新旧不問十句。氏名、雅号、年令、都道府県名、所属柳社、性別を明記。締切十二月末日、発表翌年四月号。参加料五百円、発表誌代二百円。事務局〒〇六二札幌市豊平区平岸三条十三丁目八二加瀬信彦方誌上合同句集編集事務局宛。明年度北海道川柳大会は札幌市で開催決定。

▼柳宴の野口北羊氏第二句集「有情」が発刊。B6三百頁価二千円。岐阜市本郷町六丁目井川文弥方岐阜川柳社。なお、出版記念川柳大会は来年一月二十一日午前十一時から岐阜会館で。岐阜市司町三九。電車バス大学病院前。兼題―酒、地下街、素顔、金庫、自由、指紋、未練、タイミング、歴史、松、各二句出席者のみ、一時締切。費五百円、懇親宴千五百円。

▼川柳ジャーナル社新刊予告 ◎松本芳味句集「難波船」一七〇頁価千円十二月十五日発売。◎ジャーナル双書第一編「新川柳についての歴史的研究」倉林ひとみ著八〇頁価三百円振替大阪三一六六七四。

▼伊志田孝三郎氏（名古屋市）は十月二十日十一時大腸ガンで急逝、八十六才の御高令だった。氏には川柳雑誌時代に卓越した文章で幾度かご執筆ねがったことがある。その追悼句会は十一月五日十時から、志摩町の常照寺で盛大に行われた

▼第十五回近県川柳大会は九月三日竹原市福祉会館で開かれ、出席百七十七名投句七十八名を集めて盛会。第一位広島県知事賞は越智虹二氏（西条市）が獲得。大阪から菊沢小松園氏外三名が参加した。

▼「北上」八月号を以って二百号を迎え合同自選句集で記念特集号を飾った。なお「北上」四十六年度最優秀句は―中年の燃やせば燃える火種抱く―花巻市谷地化石氏。

▼米沢暁明氏（大洲市）九州から―阿蘇の砂ポロポロこぼれ別府の湯―暁明

▼「はこだて」の故横山竹二氏の遺句集「黙祷」が発刊されたが豪華本で限定非売版。

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミン®A

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠

☆食後すぐのむのが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で

タケダ

㉘

▼大阪市南区医師会恒例の秋のレクは琵琶湖北辺の永源寺へ。かっての杏林川柳会の阿茶女史をはじめ豊平次さん、編集部の一三夫・葉子さんも紅葉の近江路を楽しまれた。

▼小泉戸牟氏（西日本新聞）から―十一月号上出来でした。先日箱根の明神ケ岳へ―ずぶぬれを迎えてくれた山の茶屋―戸牟。

・同人の動向

▼若本多久志氏（副理事長）の随筆「凡愚のたわごと」二九〇ページが近く出版される。詳細は次号。（十月三十日から二泊三日のドライブ旅行で北越白山々麓の鳩ケ湯温泉へ―北越の山の紅葉に身を洗い―多久志）また朝日テレビの朝七時の〝けさの人〟に左書きで出演された。

▼本田恵二朗氏（倉敷市）のご長男（医師）がアメリカへ大学や病院の見学に。―お守を渡米へ持たす母ごころ―恵二朗。

▼小川静観堂氏（伊丹市）は元軍医大佐だが伊丹自衛隊で十二年間医療に当たり十一月に感謝状受けられた

▼尼緑之助氏（出雲市）の句碑建立の賛同者が四百名になったと、草丘氏からのお便り。

▼児島与呂志氏（大阪市）の所属する〝川柳大阪〟の（大阪市交通局）部員諸氏の作品発表会が（文化祭）盛大に行われた。

▼藤井明朗氏（島根県）から―二賞独占のよろこびや末っ子の結婚やらで大わらわです。

▼藤井春日氏（倉敷市）の定退後は同人竹内翁童氏がかわって丸文川柳会を育成されている。

▼奥谷弘朗氏（倉敷市）は青年会議所OBで組織しているミニヤクラブで川柳を指導しておられる。

▼山田季賛氏（高槻市）八月二十一日広島転勤以来、竹原川柳大会、安徳天皇陵、秋芳洞、本社同人総会出席と、東奔西走された。

▼西いわを氏（藤井寺市）十月十七日日本楽器停年組の会合に出席、浜名湖で歓談

▼飯田悦郎氏（八尾市）は十一月中旬に退院。

▼橋高薫風編集長は堀江正朗氏の還暦句会に出席、岳人、遥児氏らと共に、秀華、秀子、美栄、文子、千代氏ら山陰の女性作家と感激の一日を送り、また十一月初旬好啓、文衛、耕花諸氏らと宮本武蔵の生誕地を訪ねられた。

▼小砂白汀氏（島根県）の自宅新築と令息の結婚が十月九日と、このところおめでたつづきである。

▼隠岐不静氏（梅谷庵・姫路市）は十一月十三、四日赤穂御崎へ柳務慰安のため編集部の一三夫氏と葉子さんを招待された。

▼越智一水氏（今治市）は月刊誌〝ポスト〟の雑詠「創苑」の選者になられた。

▼浅川八郎氏（富田林市）から―ソコヒがひどくなり柳せんへ句を書くのも一と苦労ですと。

▼久米奈良子さん（東大阪市）が十一月十一、十二日、長堀橋の福徳ホール八階で開かれたささなみ会の書道展に額一点を出品。

▼不二田一三夫氏は芸術文化十一月号に「川柳おしどり作家」を執筆。また関西新聞の〝近畿は一つ〟の標語に入選、九日に開かれた同社の表彰式に出席され、杉本辰一氏（元不朽洞会員現購読者）も入選された。

▼舟木与根一氏（松江市）の母堂フサノさん（六六歳）は十月十七日逝去。謹悼。

▼宮尾あいきさん（大阪市）の夫君末光氏（六二歳）が十一月八日逝去。葬儀は西成区冠婚葬祭相互センター。南大阪川柳会の人々ほか川柳関係多数参列。謹悼。

▼**菜の花句会**―十二月十七日（日）午後二時―題―闇汁・ふり返える・診察・毒舌―会費三百円（他に百円ほどの食物ご持参）会場は八尾天神さん。

▼**南大阪川柳会**―十二月二十日（水）午後六時から―題―かな・器・気軽・解く―会場は今月は文秋居近くの北生野町一丁目光明寺。

▼**南海川柳会**―十二月二十一日―題―つり銭・蒸発・商魂―会場は南海電鉄本社食堂内。

▼**川柳東大阪**―十二月二十三日午後六時から―題―風当り・金蔓・寒行・カレンダー。会場は永和駅前市民会館。

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四　条
高島屋

本社 十一月句会

会場　以和貴荘
八日　午後六時

どっちを向いても文化祭川柳大会がひしめき合っている十一月句会。

多久志氏の柳話は、英語の乱れ、敬語の行き過ぎ、当用漢字による不便さをご自身の体験から訴えられる。とくに〝ないないづくし〟による当用漢字への反ばつは喝采を浴びた。―閉会後、会場ロビーで文化祭川柳大会の幹事が集合し打ち合わせを行なった。

月間賞杯は児島与呂志氏が獲得。

（河井庸佑整理）

出席―古方・徹舟・葛城・喜風・緑水・たかし・新之助・柳志・いわを・敏・一三夫・肖二・文秋・一舟・瓢太・三郎・静馬・柳宏子・酔々・野迷路・好一・維久子・千万子・綾女・三十四・勝晴・喜美子・栞・いさむ・与呂志・洋敏・花梢・鶴声・太茂津・吸江・牧人・百酒・儀一・百合・多久志・頂留子・形水・一二三・岳人・静歩・凡九郎・清人・葵水・夢成・筑前・静香・庸佑・好郎・小松園・弥生・金三・鬼遊・重人・薫風・葉子。

席題「新幹線」　児島与呂志選

西成に棲み 新幹線に 用がない　鬼遊
新幹線から 芸者 呼んどいて　三十四
酒を 飲むだけへ 新幹線急ぎ　葵水
電報で 報せ 新幹線で 無事帰宅　いさむ
新幹線でき 流行る 店廃る 店　形水
新幹線 ポケット瓶を 飲み 残し　牧人
新幹線 梅田の 酒が 銀座で 残り　吸江
日本へ 筋金 入れた 新幹線 金三
遠いからやめると 言えぬ 新幹線 静馬
新幹線やっと ふたりの 顔になる 庸佑
新幹線 とんぼ返えりの 使者に立ち 牧人
新幹線であえ ない 別れした 娘 金三
せっかちな 日本を つくる 新幹線 洋敏
きびに八ツ 橋 網棚へ 新幹線 三十四
東京へ アッという まの 新幹線 勝晴
新幹線 狭い 日本を 狭くする 緑水
一番の 新幹線に 乗れと 酌ぎ　与呂志

席題「恩人」　神谷凡九郎選

恩人がちょくちょく来ては飲んで去に　静馬
恩は恩 貸しは 貸しやと 悪びれず　柳宏子
恩 うけた 事が 自慢の 三年忌　柳志
恩人を 負かして 笑う日の 地酒　岳人
酒 好きの 恩人に して 話しよし　栞
恩返し せよとは教科書 書いてなし　鶴声
回り道したが 恩人に 喜ばれ　いさむ
恩人に 涙 拭かれる 羽目になり　小松園
恩人の墓へ 対話の菊を 挿す　緑水
恩人に 似てるが 好かんくせを持ち　一舟
恩人の 歳まで 生きて 恩を 識る　いわを
恩人が ニコニコ として へり下り　肖二
恩人を 忘れる 程に 恋をする　筑前
恩人と 言われ 思い 出 こそばゆい　多久志
恩人に あえる 出世の 花をもち　筑前
恩人に肩 貸して 出る 縄 のれん　勝晴
恩人のユーモアたっぷりテープする　静歩
恩人や さかいに 味方 しに くうて　古方
罪は 罪恩人の 獄舎 冬に 入る　新之助
恩人は 養老院で 達者らし　三十四
落ちぶれて 昔の 恩を 愚痴が 売り　一二三
恩人に されて 迷惑 背 負い 込み　洋敏
恩人を 忘れぬ 犬を 見習わず　儀一
にぎりめし わが恩人は 故郷を出ず　薫風
訪えば 恩人 小さく 老い 給う　喜美子
恩人をダシに くだ 巻く 謝恩会　勝晴
恩人 にその 後の 姿見 てもらい　牧人
なつかしい 猫 背で 恩人 駅に降り　吸江
恩人の 怒りが 手帳の なかにある　夢成
ほんとうのことを 恩人 言いそびれ　洋敏
過去を知る 恩人過去を 褒めてくれ　与呂志
恩人は 一癖 のある 良い 男　いわを
恩人へ オリの けものが 牙 向ける　静馬
諭す 子へ 親の 御恩も 通じない　喜風
恩人に 返せる 義理は 動くだけ　重人
恩人に 報いず 恩を 売る 自嘲　太茂津
あれしきの恩を返えすにくどすぎる　薫風
田舎出の 恩人 だから 下駄履か　筑前
利子添えて 去年の師走の 礼に来る　一三夫
恩人は 心の 底にある 疼き　太茂津
恩人と 言う 一線は 何処に 引こ　百合
恩人は 無いまま 天地の 愛に 生き　葛城
僕が恩人僕 そんな こと 忘れてた　古方
どんぞこに落されうらんでた恩人サ　凡九郎

席題「内股」　西　いわを選

ぎこちなく内股で来る角かくし　葛城
内股のこころ秋風に覗かれる　小松園
内股で走る女将の急な用　栞
内股の女家元とすぐわかり　肖二
内股の白さに処女を感じとり　洋敏
内股もお師匠はんは板に付き　文秋
内股に戻る芸妓のハイヒール　静馬
内股の似んでもよいとこだけが似る　徹舟
内股が少し気になる男舞　好郎
内股で今日は茶室の客となり　酔々
内股でゆけばもつぱれそうな脚　葵水
内股でウーマンリブの風を切り　静歩
大事な時に内股かゆくなり　柳宏子
内股を見せて稼いでいるポルノ　重人
内股の母に明治の香が残る　喜風
ジーパンを穿いて内股気にならぬ　形水
内股の舞台もあぐらをかく楽屋　鶴声
内股の小巾へ溝が広ろすぎる　岳人
服着たらもう内股で歩かない　庸佑
浜町をある日セビロの章太郎　勝晴
内股は何時も後からついて行き　喜美子
内股で歩いて笑わす役がつき　庸佑
内股の男出て来る釜ケ崎　肖二
内股をみせてマダムは終電車　敏
監督の指示内股で歩かされ　酔々
内股を外国で見た日本妻　筑前
内股でない妓も通る先斗町　吸江
ざんげするつもり内股になっていた　小松園
内股が楽屋にくればあぐらくみ　花梢
内股の隙を狙った奇襲策　形水
舞扇持つ内股のあでやかさ　いさむ
内股へ蛇の目の傘がよく似合い　好一
少し困った顔で内股で歩く妻　夢成
内股で飛べない溝が出来た仲　葵水
内股とにらんだ刑事の勘のさえ　三十四
内股を見せて女の勝つ勝負　緑水
格子戸の街内股がよく似合い　いわを

兼題「稼ぐ」　金井　文秋選

別口の稼ぎを妻に感づかれ　清女
時の日も時間にけじめのない稼ぎ　悦郎
老骨へ鞭打ち今日の靴を履く　どんたく
共稼ぎ妻のプランが甘すぎる　季賛
稼ぎ高グラフになってしごかれる　晩歩
かあちゃんの為なら稼ぐ軽い靴　滋雀
出稼ぎを迎える妻の初袷　花梢
子の稼ぎ一人前と市民税　千万子
徹夜してまで販売機稼がされ　重人
バイトで稼ぐ小使いはちゃんと取り　静香
稼ぎにはならぬペンのみよう走り　小松園
稼ぐ道稲をみかんに切りかえる　葵水
子持ちとは見せぬ化粧で夜を稼ぎ　百酒
稼ぎのドラマ古稀を迎える父の手に　百合
黙々と稼ぐバタ屋の犬肥る　柳宏子
稼いで来た自信どっかと座らせる　小松園
稼ぐ靴みがく仕合せ今日も無事　喜美子
稼ぐのも蟻は本能人は欲　野迷路
人気歌手稼げる時に稼いどき　緑水
つくろって洗った分を稼ぎとし　喜美子
出稼ぎの酒に子供の顔が浮き　吸江
出稼ぎの倉庫で故郷の米に会い　葵水
よう稼ぎまんなと近所皮肉言い　洋敏
婦人科へ相談に来た共稼ぎ　柳志
内職の母仕合わせな子の寝息　酔々
残業で稼ぎ屋台で顔がきき　吸江
踊子の足が稼いでいるライン　酔々
へそくりを稼いだようにいうも妻　栞
税務署のほうから稼ぎ教えられ　洋敏
子心に出稼ぎという字を嫌い　三郎
子供には見られたくない灯に稼ぐ　花梢
貧乏でなめられ稼いで貶される　百酒
青い目に狂気とうつる程稼ぎ　一舟
夫の座ゆらぐ稼ぎが妻にあり　文秋

兼題「勲章」　橘高　薫風選

菊香る勲章へ雨が降り　季賛
勲章をつけて票田のぞいて見　晩歩
おもちゃの勲章肩いからせ胸張って　一栄
てのひらの勲章命より重く　酔々
好きな事に徹し勲章もらう幸　文秋
勲章が泳いでるような金魚鉢　どんたく
なにもしないのに勲章をくれた　夢成
女の勲章二つの乳房ぶらさがり　一三夫
そのうちにみんな勲章貰いそう　静歩
勲章を見せに帰えれば母小さく　千万子
勲章を飾れる胸が僕にない　重人
勲章のそのかたわらに遺児がいた　緑水
駄菓子屋で僕は勲章買うて来た　岳人
嫌われて首相八年大勲位　柳志
勲章をみんなさげると重いです　古方
叙勲の日もうあの人も七十か　吸江

勲章の 値打ち そろそろ とり 戻し　柳宏子
丹精に 勲章の ような 花が 咲き　儀一
勲章へ 矍鑠たり 恍惚たり　百酒
本人に すれば 勲章 遅かった　一舟
勲章に 縁なく 赤い 羽根を つけ　酔々
ごきげんの 父が 勲章 出して 来る　静香
勲章の 栄光 値札に よみがえり　重人
勲章を 素直に 受けて ホッと させ　一三夫
勲章を 貰うそれより 被ギ者となる　夢成
勲章へ 話しの ながい 未亡人　夢成
勲章を ほしがる 男 髭を つけ　鬼遊
悪名を 残し 勲章 までもらい　洋敏
人間が 呉れる 勲章 たかが 知れ　文秋
勲章を 隠して 養老院に 入り　肖二
軍服と 勲章に ある 主の 未練　百合
肉親に 抱かれ 勲章 ひとりごと　維久子
文化 勲章 痩せた 夫に 肥えた 妻　栞
写真 迄 焼かれた 胸に 大勲位　一舟
風の 道わが 勲章は 雪の 華　薫風

兼題「夜長」　戸田　古方選

別 居 の 夜長 本 を 読 み ふけり　季 賛
地下に住み夜長も知らず明日が来る　藤持
灯がついて それから 腹巻 編み上り　一栄
天国も 地獄も 夜長 もて あ まし　酔々
一行詩 ふっと 生まれて くる 夜長　酔々
夜の長さ 虫もこん負け して泣かず　鶴声
倦怠期 益々 冷 え て く る 夜 長　花梢
農民ら 秋の 夜長に ゼニ を 読み　勝晴
イミテーションの輝き夜長に逆らわず　いさむ
ふりむいた おんなと秋の 夜を拾う　夢成
時計の針が 止っているような 夜長　悦郎
眠り 浅く 夜の 長さを 持て 余し　瓢太
大正の 生れは 針 持つ 夜 長 とし　喜美子
夜長の 蛾 動かず午前 二時となる　葵水
定年 の 夜長 に 雨も 降 り 叩 き　百合
せんべなど 噛り 夫婦に 夜が 長い　形水
カビ 臭い 話に なって きた 夜 長　花梢
地下街の 虫は 夜長を もて あ まし　敏
一人居る 夜長 灯火も 親 し め ず　好一
ゴキブリよ 僕も 夜長を 持て 余し　岳人
こおろぎを 踏んで 夜長を 人 心 地　新之助
徒食して これが 老後が 夜の 長き　葛城
老いと言う 境地で 夜長 評価 する　凡九郎
老眼が 鼻に おもたい 夜 長 か な　新之助
北を 指 す 秋の 夜長 の 風ぐるま　夢成
夜長にも かか わりのない 墓の石　いわを
こんな夜長にやっぱり宵寝しなはんの　古方

兼題「トラブル」　大坂　形水選

興奮が さめトラブルの 阿呆らしさ　滋雀
トラブルの 結果 知り たい 世間様　一栄
トラブルもあって 職場の 輪が堅い　柳信
トラブルも 弱肉強食で ケリがつき　一三夫
一、二年 トラブル の ない 新開地　喜美子
トラブルを 起した主は そっぱ向き　吸江
血圧の高さ トラブルへ 目をつぶり　静香
トラブルがあってふたりを近づける　失名
まとめる気ないがトラブル知りたがり　文秋
トラブルの 石を 沈めて 信じ 合う　鬼遊
営業 好転 トラブル いつ か 消え　好郎
トラブル も 計算 ずみの 欠陥 車　多久志
原点 喪失 小さな小さなトラブルよ　夢成
法律を かじって トラブル長引かせ　徹舟
揉める もと 地球の 上に 線を引き　小松園
トラブルを さけて通った 嫁の知恵　重人
仲の好い 夫婦へ 石を 投げに 来る　鬼遊
トラブルにまき込まれまいとまき込まれ　与呂志
トラブルへ猫 阿呆らしく 欠伸する　鬼遊
トラブルへ 六法全書も 引き出され　金三
金が顔出してトラブル なおも つれ　三郎
トラブルから 逃げようと する紅茶　夢成
若さとは 恋のトラブル 追いかける　肖二
ちょっとしたトラブル二人の縁となり　重人
トラブルを 双手で受けて 立つ構え　古方
トラブルへ赤いリンゴが歯にしみる　夢成
トラブルへつきあげが来るおえら方　金三
トラブルを防ぐルールでもめている　静馬
トラブルの 悲劇は つづく皮膚の色　一三夫
トラブルへやっぱり彼奴まじっとり　与呂志
配分に トラブル 起きる 儲け すぎ　形水

★

川柳塔社常任理事会（十一月四日夜）

議題は文化祭川柳大会にしぼられた。兼・席題10題がどのような結果になるか、これはやってみないとわからない。

改題創刊のときから〝近作柳樽〟のタイトルを変えることが提案されていた。どうやら機が熟し〝**水煙抄**〟として、新年号から船出をすることになった。

出席―形水・柳宏子・柳志・多久志・庸佑・栞・薫風・生々庵・一三夫諸氏。

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

東大阪川柳会

竹中肖二報

倒産の爪跡残し ブーム去り 文秋
リバイバルブームへパパの軍歌出る 柳宏子
ブームもう去って柳生の陽のしじま 六龍子
惚れた瞳に 美男は貴方 だけに見え 悦郎
貴方ならどう 逃げますか この一手 肖二
満ち足りた 老後へ貴方と 歩を合せ 誓二
かもめから白さを 奪って ゆく港 酔々
子種 ない 夫婦 責任 なすり合い 喜風
御神火の 燃える 港が 雨に濡れ 湖風
港まで 来て フト 女気が 変り 儀一
漂流の かすかに 捉えた 港の 灯 水京
独特の 構図が 決まる 港まち 古方
夕焼ける 港の 船は 黒く 浮く 一栄
港町に 生れて マドロスを 嫌い あいき
珍客に されて 思わず 長居する 思月
歓待が 居づらく させる 兄の家 綾女
居心地を 言えば 波風 立ち そうな 恒明
環境に 憑かれ 永住 するを 決め 鶴声
冷房が 効いて 美人の いる 職場 鬼遊
結局はうちの茶の間の 茶が うまい 凡路

堺・若芽川柳句会

吉岡青香報

クーラーの部屋でセールスまだねばり 草春
クーラー代 払う内職 汗をかき 清女
クーラーの いらぬ 屋敷を 羨まれ 宏子
スターから 二流三流と みくびられ 儀一
二流でもチップキッチリとるつもり 摩天郎
建売りが 並び 二流の 街となり 一舟
二度目 でも 初耳に する 苦労人 静馬
初耳に 長屋の 会議 夜も ふける 藤持
トップ屋の 耳が動いて いるロビー 笑痴
農薬で 百まで 踊れない 雀 雄次郎
人間と 雀 まじめに 欺し 合い 天笑
カナリヤの 落ち餌を 待っている雀 たつお
銭も 名も 要らぬ 生涯 恋と 生き 誓二
人生の ゴールへ 夢の 青いまま 夢成
定年の 生涯 植木を 枯らすまい 筑前
落ちて なお まだ 尻馬 を 疑わず 一二三
なめられているとも知らぬお人好し 葵水
家つきは ぼち ぼち 養子 尻にしき 徳子
行列の 尻さ がしてる 宝くじ 柳信
教わって 来た 口実 を 見破られ 青香
可愛い口実だからだまされておこう 柳影
口実を 考えている 貸浴衣 小松園

川柳大阪

児島与呂志報

ハイウェイ マヒで走れず 金取られ 敏
母なれば こそ 乳飲ます 胸をあけ 徳
裏表 なくて 日の丸 美しい 徹
フト見れば ぼしぼりに ぬれの汚れよう 舟
長寿箸わざわざ 仕込みに 旅へ立ち 誓二
胸の内 見せたら義理が からみつき 秀峰
忙しい 人の真似して 笑い合い 重人
親馬 鹿の 欲に 仲人逆わず 一乃字
箸そっと 置いて 両手を 合わす人 凡々
手に触れて 済まない顔を 押し戻し 本陰棒
銀婚へ ゴール インした 夫婦 箸 胡蝶
割箸をこすって うどん まだかいな 武松
六十路 過ぎ 冗談 云える 予裕出来 笑風
大阪の 雨は虹を こしらう芸がない 洛酔
雨降れば 覚悟してます 回り道 喜酔
初節句 母の おひざで 祝膳 欣弥
天無常 慈雨と 暴雨の からみ あい 楽々
番台へ 背を 向け 女 脱ぎ はじめ 六龍子
成金が 忘れられた ヘボ 将棋 与呂志

まるべに川柳会（大阪市）

村田多平報

本命は 噂にも 出ず ゴールイン 慶子
患うて 解った 健康の ありがたさ 幸子
卑下するより自惚れいよと教えられ 貞
躾糸 切って 清秋の 中に居る 節子
悠々と 後輩 送る ゆとり 出来 一世
噂した 主が 入って 話題 替え 扇里
公害を 忘れ させるか 赤とんぼ 茂児
お隣りも 読んでる らしい 秋の夜 星斗
育つもの 育てるものか おみなえし 好郎
定年 は 哀し 宿命 なれば とて 瓢太

川柳わかやま

垂井葵水報

二枚舌 ない 悲しさで ひそと 棲み 武雄
二次会の 酒は 話に 酔わし ときを 佳宵
豆カメラ 大胆 モデルの 前へ ゆき 栄
やめる気でいたのがずばり言ってのけ 保夫
ずばり言う 度胸が なくて 片思い 延伊知
ずばり言う地位と金とを持っている 牧人
ずばり言えば やはり お金のいる話 裕美
つきささる 話へ 男 ふりむ かず 雀踊子
よりどり見どりどんなモデルもあり社会 九九郎
商魂の モデルチェンジを 追う若さ ひろお
姑さんの 陽気をモデルに 進路決め 里美
その蔭に 浮いた噂も ない モデル 白光子
さっそうと モデル個展に 顔を見せ 一風
ふる里は 公害の ない モデル地区 智
よい電話 ふたつ返事で とんで行く 春亭
二ツ割 ポンと 西瓜の 叩き売り 亀川
二二が 四九九 高だかと 孫の声 千枝子
砂浜に 水着モデルの 勢ぞろい 三千代

トリ肌を　さすってモデル　笑み給い　静彦
二の足をふんだ見合いにひと目惚れ　みさお
孫二人撮るシャッターの切りどころ　たかし
ベランダの二階　同志の夕　涼み　照代
現実を二の次にする　メロドラマ　翠雨
シャッターを切ればモデルの笑顔消え　義広
パパだけが夢中になったプラモデル　ふみよ
本心をズバリ言うてからの仲　富子
ヤマカンがずばり当ってうろたえる　大輪
自惚れがずばり言われて気がつかず　としよ
ずばり言ってサラリーマンを脱却す　庄治
よかったと近火見舞へ瓶さげて　増蔵
見舞われていらぬ噂へ立つ女　城石
ふた言目いつもの自慢すっと出る　義三郎
五階まで上って面会謝絶札　千寿子
核心へずばりと突いて身をかわす　太茂津
漫才のコンビに増えたしわの数　酔々
偵察もかね胃潰瘍見舞てくる　十郎
節制のない肌見抜くカメラの目　葵水
金ならばないぜ相談突き離し　好郎

八尾菜の花川柳会　飯田悦郎報

今日限りで処女と別れる角隠し　誓二
母だけが我が娘を処女と信じ切り　儀一
処女峰へ闘志が湧いて来た画集　岳人
四十年まぶたの君は処女のまま　三十四
女学生すてきな香りのなすり合い　百合
香り満つ女ひとりの白い城　鬼遊
ジャスミンの女が消えた社長室　静馬
夕顔に触れて明日なき香に媚びる　悦郎
この花に香りが欲しい手内職　君子
松茸の香りが消える程に切り　鶴声
金メダル苦労したから出る涙　美幸
苦労話の楽しく出来る齢となり　牧人
親の情は苦労させたい子がひとり　青香
裸一貫苦労がつくる指の節　酔々
子沢山親は苦労と思うてず　あいき
お互いにズバリと言える友であり　美房
親友にズバリ突かれた胸のうち　綾女
末っ娘がズバリと母を批判する　頂留子
紅一点だから名前をすぐ覚え　文秋
紅一点女を意識させられる　智子
紅一点寄る年波には勝てず　小松園
印象にしびれただけの愛去りぬ　美代
落ちぶれし友の印象眠らせず　弥生
モンタージュまた印象が描きかえる　凡九郎
紅一点煙草をふかし酒も飲み　栞

川柳ささやま　河原みのる報

良い気分と女細目でもたれかけ　村雨
ギコチない気分セン抜がカットバシ　竹堂
倖は二人して見る旅の虹　素水
虹の色虹でなければ見られない　文次郎
先立つ子脱ぐことのない足袋はかせ　百合子
宿命の衣あせるほど脱げず　雅佐女
丸裸ひっくり返って幸を知り　宗珠
男まさり脱げば女の肌となる　とおる
着てかせぐ女脱いでもまた稼ぎ　初音
ためらわず壁には見せて脱ぐ女　近江
ブザーにも帰りましたというリズム　無聖
嬉しさがリズムとなって皿洗う　越山
二階借りしてて内閣気に入らず　八陣
そもそもの断絶二階の勉強室　みのる
本腰のお点前日頃の娘に見えず　与志
父の死へ本腰入れた男の瞳　可住
肩書を捨てた気分の今日の釣り　ヤン坊
つまい食いかぶせた猫にも分けてやり　蜻蛉

和歌山七面句会　三幸報

敗戦を忘れた箸の上げ下ろし　芳童
挨拶もそこそこにして盤を出し　昭伸
松茸の見事な傘が売れ残り　城石

第24回　大阪文化祭川柳大会秀句

思案まだ秒針だけが休みなし　本多　清人
麻痺の娘に夜霧がコント置いてゆく　室田　千尋
父が壁になって縁談またこわれ　岩垣一点子
中国の歴史中国人が変え　西川　豊太
イメージを描き静かに受話器置く　福島　郁三
ベトナムの土まだ捨てず鍬を振り　安田　吉甫
馳けても馳けても妻の手のひらである　柏原幻一郎
日本語を間違うて書く母恋し　上田　愛水
合鍵のまだ二つ要る戸籍面　紅霧　一奉
損得を知ってる舌はよく動き　高杉　鬼遊
退院の元に戻った夫婦箸　冨子
松茸を薬のようにいれてあり　政夫
南天の箸を天理の街で買い　勇次
一票はもらったつもりの御挨拶　太茂津
箸置いてから小言言う　淳子
溜息が出ただけ松茸さようなら　佐智子
挨拶にはならぬ挨拶長々と　清治
酔った手が箸いつまでもはなさない　智恵女
隣から松茸の良い匂い　其夕
周さんの長箸角さんを取りもちし　光治
日中の解け合う初めは箸だった　三幸

川柳ウイロー社（ハワイ）　林蒼蛇樓報

それとなく眼で知らせ合う仲となり　美沙
物価高財布をあけて苦笑い　オチエ
主婦達が寄れば話題は物価高　エス子
眼力に狂いはないよと祖父の意地　暁舟
さり気ない女二人の眼に火花　カロ女
公約の物価統制一枚舌　拝山
へそくりへチョッピリひびく物価高　万里歩
物価高米価も上げろとお百姓　公女
眼をとじて思いのままに想を練り　紅溪
特売品原価ですよと店の嘘　十吉
目かくしのゲームみごとに西瓜割る　河舟
眼が光る政治の蔭に黒い霧　快夢起
その色目もはや利かないうばざくら　北海
増給も上る物価に追いつけず　椰子郎
物価高キョロキョロと見て歩くだけ　伯雲
眼にあまる無軌道昔は君子国　蒼蛇樓

川柳たけはら　森井菁居報

雲つかむ話はそっと聞き流し　天石庵
おじぎした少女におんなふと感ず　静水
感情をかくし切れない歩を早め　房子
ワカサダヨヤマチャンなど飲まる気　蘭幸
噂はねかえさん窓の灯よ煌々　不朽
世渡りの上手はしょせん生れつき　大陸
どうしても生きねばならぬ注射針　貞子
巣燕に障子を少し開けて留守　五湖
倖せは妻もきりりと動め人　春昇
黒四の犠牲者目立たぬように建つ　政己
海はるか海の緑を飲みほさん　笑子
趣味多忙水がもらえぬ植木鉢　凡女
男の子パパを一番喜ばせ　そのみ
三度目の正直男の児が生まれ　菁居
キャンパスにブルーをたっぷり故郷の色　浄美
ゆり籠のような電車で乗りすごす　雅鳳
学生服ぬぎ捨て希望の血が躍る　康宏

雅号ぶっちゃけばなし（105）

さめごろう

おぎの

荻野鮫虎狼

皆様が恐い号だと云います。が写真を見て下さい。あまり恐い顔はしていません。昭和三十二年入院中に考えたのがこの号です。鮫は水魚の交わりを表し皆様と仲よく、虎は勇気を、又大虎小虎と酒の交際を意味します。狼はけだものの中で良いと書きます。川柳を通じてけだものの中で一番よい人間になりたいと思っています。余り皆様の心に波を立ててはと思い私の師浜田久米雄氏に相談致しましたが君には一番ぴったりの雅号だと云われ、現在も愛用して居ります。川柳と国鉄を一生懸命に愛して居る私ですが、なかなか命ある句が生まれません。

（国鉄職員　四十七歳）

公害はどうあれうまいにぎり飯　鬼焼
傷心を優しく包む今日の雨　千百合
いやな事みんな忘れて雨の句座　かつ子

川口弘生報

城北明朗会

金になるマッチホステスすり続け　春巣
ほんとうの味を炭火が出してくれ　進
焼け出され皆元気と喜こばれ　生仏
迷惑な煙火のない所から立ち　シゲ
落葉焚く母やき芋の香も交え　志津
火の玉のようにたくまし父なき子　つね
おむかいも遠くなりけり回り道　秀村
環境は公害だけと言い切れず　茶々坊
四度目は空気が悪いから遷り　弘生
耐えることに慣れて明治の母強し　三十四

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

同期生出世ばかりが顔を見せ　清女
うっかりと同期でしたに気をゆるし　儀一
同期生恋を争う破目になり　圭水
戦争を知らない同期皆揃い　柳信
同期もう枯れ葉若葉の差をみせて　貴美代
同期の桜唄えば君が生きている　宏子
覚えてるかいと同期の出るテレビ　摩天郎

駒つなぎ（大阪市）　岸南柳報

嬉しい日三面鏡に問いかける　順三
刈り揚げて鏡で尋ねる散髪屋　南柳
ポルノだけ見た週刊誌ほり出され　石捨
高校にのぞき見されているポルノ　小路
入社テストポルノ女優は着物で来　多津緒
ポルノかストリップかと迷う新世界　誓二
親として子には見せたくないポルノ　育園
ほろ酔へポルノ映画を誘われる　宏子
見学と称して主婦連ポルノ観る　眉水
浮世絵は動かぬポルノ胚白し　薫風
毛嫌いをしといてポルノそっと見る　柳信

（次号へつづく）

川柳塔社忘年句会

日時　十二月七日（木）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題　柳話
「ローン」垂井葵水選
「表沙汰」西田柳宏子選
「腹芸」本多柳志選
「耐える」正本水客選

席題　三題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　二百円
★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社

1月の兼題　「初版」「牛」　「こども」「勢ぞろい」

・募集・

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「肩凝り」吉原紅月選
「プロパン」安平次弘道選
「下取り」小谷仙山選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「ピカ一」高津徹也選
「迷い」大江秋月選
「本家」大山と金選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

年賀広告よろしくお願いいたします

定価　百八十円（送料十六円）
半年分　千百七十円（送料共）
一年分　二千二百円（送料共）
昭和四十七年十二月二十五日印刷
昭和四十七年十二月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町一〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷仲之町一〇番地　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
発行所　大阪市南区鰻谷仲之町一〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一一三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★やっと本年度の十二冊目がこれでおわる。ここでいつもよりうまいタバコの輪を天じょうへ吹き上げる。

★路郎先生も仕事中はタバコをはなされなかった。選句中は右手に赤ペン、指先きがヤニで黄色くなった左手にはタバコ。そのタバコの灰が長く伸び、先きのほうが徐々に下へ折れてきて、もう崩れるか、もう落ちるか、とそばにいる者がハラハラしたものだった。

★ぼくにもタバコの思い出がたくさんある。今月はそのうちの一つ。ぼくの話はいつも優雅じゃないのでご力ンベンを。

★戦前から可愛がっていた劇場の絵看板書きのTクンが、戦後の興行界復活までの食いつなぎに、妻クンの郷里熊本からタバコの葉や芋の葉を送ってもらい、手巻きのヤミ煙草をやり出した。

★根が絵かきのはしくれだから要領がわるく鶴橋のヤミ市でパクられ、ついに泣きつかれてボクが経営していた映画館の売店で売ってやることにした。リベートなしだったが売れるわ売れるわ、観客以外のそとの人まで買いに来た。

★ある日曜日の満員の夜、「オッサン、タバコをあるだけ買うよって全部出してんか」と若い男が二人きた。

★ヤミ商売になれていたら、〝こいつは怪しい〟とピンとくるのだが、「おおきにおおきに」と、足元に隠くしてある分まで全部ほりだしたら、「映画が終ったら駅前の交番まで来てくれ」

★小屋がハネてから交番へ寄った。スポーツ標語の賞品に貰ったバツグへ売り上げ金や標語の参考書などを入れていたが、「そッ中を見せろ」と警官に云われ、ムッとして前の札の上へ全部ブチまけてやった。その中から茨城県にいる友だち（三人軍の歌の作詞者）から、ぼくのヤミたばこ防止標語が水戸で特選になったと、赤インキで大きく書いたハガキが出てきた。〝汁の苦たばこ流すなヤミで〟

★「ヤミたばこを売って、その防止標語の特選になるなんて」と警官が苦笑した。二十四五年前の話である。

★福井野迷路元中将閣下が「路郎先生のように編集する時すってくれ」と毎月二、三十個煙草を届けてくださる。これはバチが当たりそうな話。

（不二田一三夫）

葉子コーナー

▼冬の北海道はストーブでお部屋は夏ムード。お餅を雪の中へ木箱に入れて来る年に備える。焼くとジューと音がして少し水が出ます。雪国独特の香りは格別のものがあります。

国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

国際観光旅館

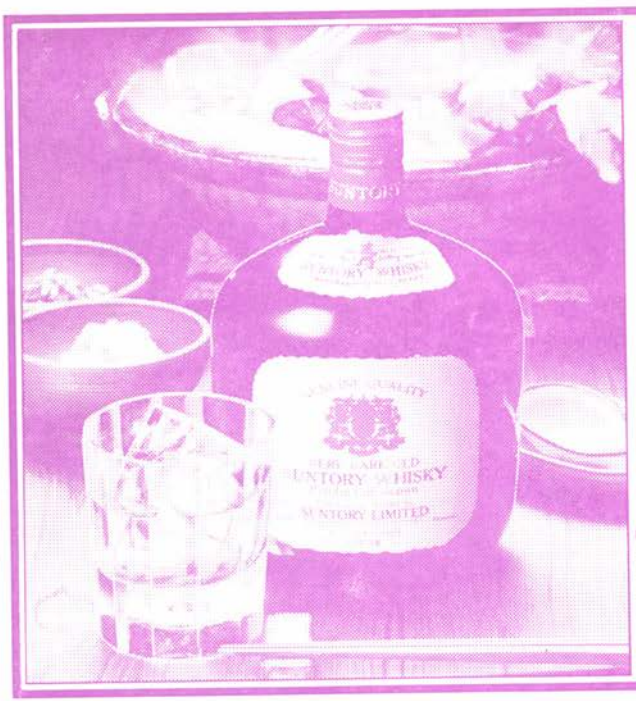
うおまたろ
魚又楼

風光明媚な海岸美を誇る

TEL 和歌山 (44)0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

昭和四十一年十一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年十二月一日発行（毎月一日発行）
「川柳塔」大三十三年 通巻五四七号

日本のこころがこもる
かぐわしい琥珀の詩――。
世界のウイスキー
サントリーオールド
760ml 1,900円



タッチでえらべば
やっぱりサコム
サンヨー電子式計算機
サコム
SACOM
見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示セロサプレス・%キー付き
16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社

川柳塔 十二月号
定価 百八十円（送料 十六円）